

山村学園短期大学紀要

第31号

- 相沢 和恵 絵本作家 林明子の世界を読み解く
—その作品と半生を辿る— (1)
- 鴨志田加奈 保育における表現活動を創る「ヒト・モノ・コト」に関する一考察
—子ども・保育者・専門講師の協働に着目して— (9)
- 巢立 佳宏 酒井 誠
保育内容「環境」と「表現」に繋がる“秘密基地づくり”遊び
—自然と関わる学び— (21)
- 福泉 博子 保育における「音楽・音楽表現」に関する一考察
—サウンド・エデュケーション（音さがし）を通して— (31)



山村学園短期大学

子ども学科

令和2年

前 号 目 次

- 相沢 和恵 岡田 理
保育者養成校と保育所における「ファーストブック」の読み合いに
ついての一考察 ― Share Books の概念に着目して―
- 今村 麻子 子どもの主体的・連続的な遊び展開への保育者の支援プロセス
―プロジェクト型の保育に注目して―
- 鴨志田加奈 学習者の協働性・創造性の涵養を目的とした総合表現授業実践
についての一考察
- 橋本 淳一 相沢 和恵 足立 祐子 黒倉 健治 中野 圭子 酒井 幸子
幼稚園・保育所・認定こども園のインクルーシブな保育のカリキュラム・
マネジメントを探る
- 橋本 夏夫 キャンパスの自然環境を活かしたナチュラル保育の試み
― 2013 ～ 2018 ―

絵本作家 林明子の世界を読み解く —その作品と半生を辿る—

Understanding the world of Picture book writer
Akiko Hayashi's world
—Traces her work and half life—

山村学園短期大学子ども学科
相 沢 和 恵
AIZAWA Kazue

I、はじめに 研究の目的

絵本「はじめてのおつかい」や「あさえとちいさいもうと」「おふろだいすき」「くつくつあるけのほん（シリーズ全4冊）」等で知られている林明子氏（1945年東京都生まれ）以下「林明子」と表す^{註1)}は、1973年に絵本「かみひこうき」（かがくのとも 小林実／作 林明子／絵）を福音館書店から発行し、以後多くの絵本を送り出している。

子ども達にとって、林明子の描く絵本は絵も文も共に大変魅力的なもので、生み出された数々の絵本は第1刷からずっと読み継がれ、増版を重ねているものばかりである。なぜ林明子の絵本は魅力があるのか、どういう理由で子ども達に支持されるのか、絵の魅力と文の魅力はどのように生まれたのか等について、本稿では、林明子のこれまでの軌跡と描いた絵本、様々なインタビュー記事等を取り上げ、林明子の絵本の魅力について若干の考察を加える。

本稿では多くの林明子の作品の中から特によく読まれている4作品、2021年1月の時点で増版数の多い「はじめてのおつかい」150刷、「こんとあき」109刷、「おつきさまこんばんは」149刷、「魔女の宅急便」88刷^{註2)}を取り上げ、其々絵の特徴、文の特徴等を林明子の半生を辿りながら読み解き、林明子の絵本の魅力について考えていきたい。

現在、日本では年間2000冊近い絵本が出版され¹⁾、絵本の読み聞かせ或いは読み合いが、家庭や保育所・幼稚園等において積極的に行われており、育児場面や保育・教育場面に欠かせないものである。保育現場での絵本の読み聞かせの意義を検討した研究では、「先ず1つに絵本そのものを楽しむ、絵本の持つ世界を存分に味わい、その物語に感動したり、驚いたり、時には悲しい気持ちを体験したりし（筆者中略）、その中で絵の美しさ、力強さ、繊細さを感じ、いくつもの文～表現の面白さを知り、身体一杯に絵本を感じる、それだけで絵本を読む意義がある」という。（青戸ら、2018年）²⁾ また、絵本の条件として、「最も重要な要因は子ども達が親しみをもって手にするような絵の体裁を持ち備えていること（筆者中略）、楽しい絵、きれいな絵、美しい絵、本来楽しみながら見ることでできるもの、とされている。（森光ら、2010年）³⁾

子どもにとっての面白い絵本、繰り返し読みたくなる絵本、魅力のある絵本とは、どのような絵本を指すのか。児童文学者の松岡享子は著書『母の友 特集“面白い絵本ってどんな絵本”（2019年）』^{註3)}の中で「おもしろい絵本」の重要性に触れ、「おもしろい絵本とは、笑えるものであれ、手に汗握る冒険ものであれ、涙を誘う悲しいものであれ、心の深いところに響く絵本、心が動く絵本、心に残る絵本」⁴⁾であるとしている。併せて「自分を一体化できる主人公がいる、冒険がある」⁵⁾も、おもしろい絵本の条件として挙げている。また、カナダのトロント公共図書館で大きな業績を残したりリアン・スミスも、その著作『児童文学論（1953年）』に「子どもたちは、純粋に“楽しみのため”に絵本を読むのであり、絵本は子どもの旺盛な好奇心を満たし、更に促し高めていくものでなくてはならない」と記している。

乳幼児期の子どもの成長にとっての絵本は、「耳で聞く読書」の時代であり、学童期の「自分で読む読書」への時期に繋がる。想像力や言語力を向上させ、生きる力を養う絵本や読書の重要性が、これまで繰り返し強調されている⁶⁾。

II、作品を読み解く視点

幼児期の子どものに適した創作物語絵本「はじめてのおつかい」「こんとあき」、乳幼児期の子どものに適した赤ちゃん絵本「おつきさまこんばんは」、学童期の子どものに適した創作童話「魔女の宅急便」の順に、絵と文に着目して読み解いていく。

絵本の種類について様々な分類の仕方があるが、本稿では・創作（物語）絵本・昔話絵本・童話絵本・ファンタジー絵本・ナンセンス絵本・文字なし絵本・言葉と詩の絵本・認識、生活絵本・科学、写真絵本・仕掛け絵本⁷⁾と分類された方法に従って論じる。

創作（物語）絵本は、絵本の中で一番広範囲なジャンルで、“絵本で物語る”ことに力点を置いて作られた絵本と定義されるものである^{註4)}。この類の絵本のテーマは様々だが、代表的なものとして「愛」「命」「知恵」「悠久の時間」等が挙げられる。絵と文がバランスよく共存して物語が語られる。起承転結が幼児期の子どもにも十分理解できて、物語の骨格がしっかりしていることが求められる。子どもの身の回りのことから始まり、さらに大きな世界や見たこともない世界にまで子どもを誘うテーマがあり、子どもは主人公に一体化して、嬉しさ、楽しさ、喜び、寂しさ、悲しみ、怒り等様々な感情を体験し、想像力を豊かに膨らませて創作物語絵本の魅力を味わう、といえるだろう。

また、赤ちゃん絵本、またはファーストブックといわれるジャンルの絵本は、子どもが初めて出会う本、の意味で0,1,2歳児を読者対象とする。ごく幼い0歳児等に、色のコントラストや輪郭のはっきりしているもの、持ちやすい小型版、絵本の読み手と聞き手の幼子が絵本を読み合うことを通じて「言葉の喜びを共有（Share）する」に値した絵本と定義付けられる。

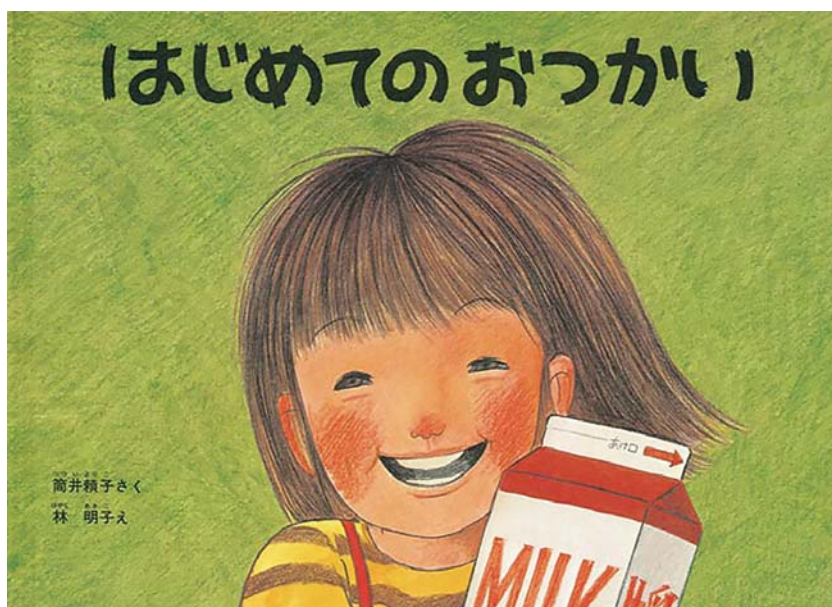
童話は、子どものためにつくられたお話で、空想的な物語を指す。昔から語り伝えられてきたおとぎ話や伝説、寓話等を含むが、特に児童文学者によって童心を基調として児童のために創作された物語を指すことが多い。

Ⅲ、作品読解

1. 「はじめてのおつかい」 筒井頼子／作 林明子／絵 福音館書店 1976年（2021年1月現在 第150刷）

①あらすじ、概要

みいちゃんという主人公が、ままだら赤ちゃんの牛乳を買ってくるようひとりでお使いに行くことを頼まれる。往きの途中で、すぐそばを走り向けるおじさんの乗った自転車にベルを鳴らされドキドキしたり、坂道でつまずいて転びお金を落としたり、誰もいない店の前で呼んでも店の人が出てきてくれなかったり、戸惑う事件が次々起こる。やっと、牛乳が買えるシーンでは、みいちゃんは我慢していた涙がぽろんとひとつおっこってしまう。お釣りを受け取り坂を下ると、そこにはママが赤ちゃんを抱いて待っていた。



②絵と文について、対談及びインタビュー等から

絵を描いた林明子にとっても文を書いた筒井頼子にとっても、担当編集者にとっても、はじめての創作物語絵本であるこの作品は、ままだらお使いを頼まれるシーンが最初の場面である。この場面の絵について、林明子は“編集者に色々アドバイスをもらい、ママが忙しい様子が絵でもよくわかるように（下線、筆者加筆）テーブルクロスが斜めになっていたりお鍋がふいていたりいたり赤ちゃんが泣いていたり…。ととてもお母さんは手が離せなさそうな感じをこの画面全体に出すよう～中略～クレヨンで落としたりコップのジュースがこぼれてたり…。編集者に絵に関してもいろいろとアドバイスしてもらって助かった”と話している。林明子は、子どもの絵を、絵本を書き始め当初はモデルを使わずに描いていたというが、このシーンの絵はまさに、絵が情景を物語る絵となっている。

不安と緊張でいっぱいながらお店目指して出発するも、みいちゃんの歩き方は、緊張し過ぎて右手と右足が同時に出た絵である。無事に牛乳を買って帰るみいちゃんの後ろ姿が描かれている見開きのページ。実はこの後ろ姿を正面から見た、勇気と誇らしさが満面に現れた顔の絵が、この絵本の表紙の絵となっている。

また、絵には色々遊びが隠されていて、門にかかった表札は「尾藤三（お父さん）」になっていたり、道の途中の張り紙に「絵のきょうしつ、まいしゅう土ようびおけいこしています せんせいははやしあきこ」と書かれていたり、「あらいいクリーニング」「くすりはきくや」という電柱に張られた看板があったりする。

読み手の幼児にとって、初めて一人で買い物に出るわくわくした気持ち、途中でちょっとした失敗が何度かあってドキドキしながらも最後は無事買い物が出来て誇らしい気持ち、頑張って得られた達成感や満足感が、丹念に描かれたみいちゃんの表情や細部まで書き込まれた街並みと人々の姿等の、その絵と文から伝わってくる。

文を書いた筒井頼子は、インタビューに答えて「物語全体の雰囲気や、子どもの心をそのままに表したような絵になっ

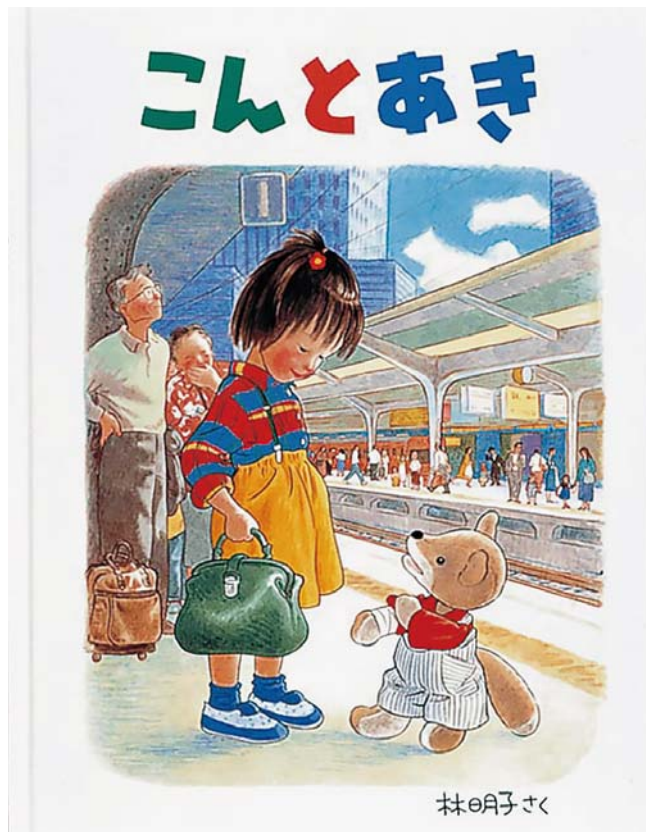
ているのが、林明子の絵の最大の魅力」と述べている。故に、今日まで多くの子ども達の心を捉え続けてロングセラーの名作絵本となっているのであろう。(対象年齢、3歳から)

なお、筒井頼子と林明子、二人で作った絵本は、以降「あさえとちいさいもうと(1979年)」「おでかけのまえに(1980年)」「おいていかないで(1981年)」「いもうとのにゅういん(1983年)」「とんことり(1986年)」全て福音館書店、がある。

2. 「こんとあき」 林明子／作、絵 福音館書店 1989年 (2021年1月現在 第109刷)

①あらすじ、概要

こんは、あきを見守るきつねのぬいぐるみ。あきが生まれる前から、砂丘町に住むあきのおばあちゃんに頼まれてやって来た。こんは、あきが大きくなるにつれて古くなり、とうとうある日腕が綻びてしまう。2人はこんを直して貰う為、汽車に乗って砂丘町を目指す。途中、駅弁を買いに行き汽車に乗り遅れそうになったこんは、しっぽをドアに挟まれ親切な車掌さんに包帯を巻いて貰ったり、砂丘で足跡を追って行くと犬に砂の中に埋められてあきに助けられたり。その度こんは「大丈夫、大丈夫」とあきに答えるものの、あきはハラハラドキドキ。あきに背負われてやっとおばあちゃんの家に通ると、おばあちゃんは2人を抱きしめこんのあちこちを調べて綻びを縫い付ける。汽車のドアに挟まれてぺしゃんこになったしっぽを元通りにする為に不本意ながらお風呂に入れられたこんは、風呂上りには出来立ての様に綺麗になり、気持ちよさげで嬉しそうな表情となる。あきを守る役割のこんから、あきに背負われておばあちゃんの家まで行き綻びを縫って貰って皆で一緒にお風呂に入ると、すっかり綺麗なきつねに戻り、守られる役割になるこん。



②絵と文について 対談及びインタビュー等から

この作品は、文も絵も林明子が担当した2作目の絵本である。第1作目「はじめてのキャンプ」で、一人で文と絵を担った自由さに病みつきになり、2作目が誕生したと林明子は述べている。こんのぬいぐるみを実際に自作し、いろいろな格好が出来るように、首を筒状に作って胴体に差し込み、口も開くように針金を入れる、という凝りようだったとのこと。これを基に何度もラフスケッチをして、この絵本も他の作品同様にとっても丁寧に仕上げたと語っている。こんが出来上がったころ、実弟に赤ちゃんが生まれ、この赤ちゃんが寝ころんだ隣にこんのぬいぐるみが写った写真もある。

「はじめてのキャンプ」の次に林明子が絵も文も自分で書いて作品にしたこのお話について、「初めて大判の絵本の原作も絵も任されて一生懸命描いたから、一番気に入っている作品で、愛おしい」と述べている。

表紙をめくると、布地に型紙の線と1ピースだけ切り取られた所に「こんとあき」と表題が描かれ、これからどんなお話が始まるのかと興味を持てる仕掛けになっている。次のページは誰も寝ていないベッドとその脇に座るこんの姿、次のページはこんより小さい赤ちゃんのあきがベッドに眠っており、あきに見入るこんの姿、次第に大きくなるあきといつも一緒に遊ぶこん、とうとう腕が綻びてしまい砂丘町に2人で出発を決意するまでの絵。汽車の中でも砂丘に着いても2人には困難が待ち受けているが、その度に何とか乗り越える場面では、其々の心情が時間の経過に沿った表情や背景に描かれている。最終ページは布の型が全て切り取られ、最後のピースに「おしまい」の文字が入っていて、読者はぬいぐるみのこんにさらに愛着を持つだろう。

また、絵の所々に、お話と直接は関係のない林明子の遊び心ある隠し絵が描かれている。例えば表紙に、こんとあきが汽車を待つプラットホームには林明子の両親も汽車を待つ姿、反対側のプラットホームには杖とシルクハットが定番のチャップリンの姿、砂丘町に向かう車中には客の中に林明子本人や夏の服装をしたサンタクロースが座っている姿等も散りばめられている。

このお話が幅広い年齢層の読者の心を揺り動かし深く響く要因のひとつに、主人公こんのくりくりした眼や心情を豊かに現す表情と愛くるしい動作の絵、あきやその他の登場人物等とのやり取りの絵を挙げたい。

1990年に講談社出版文化賞絵本賞を受賞したこの絵本は、子どものみならず子どもを慈しむ全ての年代の読者層に、今まで同様これからもずっと愛され続け読み継がれていって欲しい作品である。(対象年齢、4歳から)

3. 「おつきさまこんばんは」 林明子／作、絵 福音館書店 1986年 (2021年1月現在 第149刷)

①あらすじ、概要

静かな夜の空、猫が寝そべる屋根の上が明るくなって、暗い夜に屋根の向こうから顔を出すまんまるの鮮やかな黄色のお月様。すると雲がやってきてお月様を隠してしまう。お月様は困ったような泣きそうな表情になるが、雲は少しお月様とお話をして去っていき、再びほっとしたような真ん丸の笑顔のをぞかせる。

表情豊かな夜空の月をめぐる穏やかなひとときを、西洋的な画風を駆使し、日本的な情緒を込めて書いた作品であり、まるで話しかけてくるようなお月様の表情に、読み手も聞き手も引き込まれる。

②絵と文について 対談及びインタビュー等から

この絵本は、赤ちゃん絵本またはファーストブックと言われるジャンルの絵本である。「描き分け」という技法で絵が描かれており、「描き分け」の技法とは、印刷で使うインクの色ごとに1枚ずつ原画を描き、決まった色

を1つの版として刷りそれを重ねていき発色がクリアになる技法で、17世紀江戸時代の浮世絵を制作する工程から用いられるようになったものである。

空に浮かぶお月様を、赤ちゃんは不思議な生き物のように見つめる。そのお月様や、お月様の前を横切る雲とお話するように描かれた文と絵。群青色のコントラストと黄色のお月様の色合いがとてもきれいな、柔らかな温かみのある絵になっている。裏表紙の「あかんべー」をしたおちゃめなお月様の顔も見逃せない楽しみの要素である。

姪が赤ちゃんの頃、林明子の家の隣に住んでいたので、林明子は月夜の晩に姪を抱っこして外へ出た。月が屋根から昇ったばかりの時に前に進むと、月は屋根の向こうに隠れ、少し下がるとまた出てくる。何回も「こんばんは」と下がって、「さようなら」と前に出るととても喜んだので、その遊びをしょっちゅうしていた、と林明子はインタビューで話している。このエピソードが基で「おつきさまこんばんは」の絵本が生まれた。

「おつきさまこんばんは」は、日本各地で行われているブックスタート活動に於いて配本される絵本を選ぶ「絵本選考会議」にて選ばれる30冊の中に、2016年度から2017年度、2018年度から2020年度、2021年度から2023年度、全ての回で選書されている実績がある。その選考基準である、1.年月を経て赤ちゃんから支持され続けてきた絵本 2.今後、赤ちゃんから支持を受ける可能性が高い絵本、のいずれにも当てはまる質の高い良書である。(対象年齢 0歳から)



4. 「魔女の宅急便」 角野栄子／作 林明子／挿絵 福音館書店 1985年 (2021年1月現在 第88刷)

①あらすじ、概要

主人公のキキは13歳。13歳になったら、魔女としてひとり立ちするために家を離れて知らない町で1年間暮らす、という決まりに、魔女の少女キキは、赤いラジオを魔法のほうきの先にぶら下げて仲良しの黒猫ジジと一緒に旅に出て、新しい町で暮らし始める。キキが、知らない町ではじめての商売は宅急便屋。相棒ジジと喜び悲しみを共にしながら成長していく1年を、さわやかに描いた物語で、黒いドレスを身にまといほうきにまたがって空を飛ぶ伝統的な魔女のスタイルに、宅急便をとどけるという現代的な仕事を始めるキキとジジが、町の人達に受け入れられるようになるまでの1年間が描かれている。

キキが使えるのは“ほうきで空を飛ぶ”魔法だけ。この魔法を活かして物を届ける宅急便の仕事を始めたものの、色々事件が起きそのたびに落ち込み、つまづきながら、それでもめげずに前に進む主人公のキキといつも良い知恵を出してキ

キを助けるジジや周囲の人々の姿に、読者からも大きな共感をもって愛され、読み継がれている。

②絵と文について 対談及びインタビュー等から

角野栄子は林明子の挿絵について「ふんわりとした空気感があって、止まっていない、動いている感じがするからとても好き」とインタビューに答えている。キキの表情や動作が可愛いだけで終わらず、しっかりとしたリアリティーをもって描かれている、キキが空に昇って高いところを飛んで洗濯物を乾かす絵の構成、空の広さを感じさせる構図のキキが素晴らしい、キキが空から町に舞い降りてくる絵はヘリコプターが下りてくる時のようにキキの周りに風が舞っている感じがする、挿絵から風の音や町の喧騒まで聞こえてきそうで、この空気感がたまらない、と評している。

文を書いた作者の角野栄子は、2018年3月に児童文学のノーベル賞といわれる「国際アンデルセン賞」に選ばれた。角野栄子が書いた児童書「魔女の宅急便」は全6巻あり、その1巻目に林明子が挿絵を入れている。シンプルなシルエットをベースにしたページの中に描かれている白黒の挿絵は、二人の姪をモデルにして手縫いの黒のスカートや既製の白いワンピースを着て貰った写真を撮ったものを参考にし、それらを基に白黒の色を基調とした挿絵に仕上げた、と林明子は述べている。(対象年齢 自分で読むなら：小学中学年から)



IV、考察

以上、本稿では林明子の作品について、絵や文、作品の作成過程等に目して読み解いてきた。ここでは、それらを踏まえつつ林明子作品が持つ面白さについてまとめを行う。林明子作品の魅力を形作る大きな要因に、林明子自身の人生経験がもたらしたものが計り知れないのは言うまでもない。半生をたどると、絵本作りに素晴らしい影響をもたらした彼女の成育歴が見出される。

1. 絵について

林明子は、子どもの絵を、絵本を書き始め当初はモデルを使わずに描いていた。「私は5人兄弟で、そのうち私を除いて女が3人いて、其々子どもがいる。絵本を描き始めた時から、いつも丁度良い具合に順々に姉や妹から小さい子どもをあつらえてもらったという幸せ者」と語っている。身近にいた甥や姪などがモデルとして登場し出すのは、「しゃぼんだま」(かがくのとも 小林実/作 林明子/絵 福音館書店 1975年)からである。描かれた子どもの生き生きとした可愛らしさに思わず見入ってしまう魅力的な絵は、このモデルたちの存在なくしては語れない、と林明子は述べている。

絵を描くときに参考にする為、林明子は子ども達の写真をたくさん撮った。姪や甥が主な被写体で、いつも可愛い子ども達が身近にいてモデルに困らなかった、子ども達は一瞬にして大きくなってしまいうから、写真を撮っておいて本当に良かった、という。

例えば、「あさえとちいさいいもうと」(前述)では、初めて自身の姪をモデルに描いたこの絵本の最後のシーン、あさえが妹を抱きかかえる絵について林明子は、対談の中で、「無心というか、今なにが起きているか知らないでなんとなく身を任せている妹の(下線 筆者)姿ってすごくかわいい」と話している。

2. 夫の故・征矢清氏(1935年～2008)年(以下、征矢)の存在について

夫である征矢の影響も大きい。絵本「きょうはなんのひ」(瀬田貞二/作 林明子/絵 福音館書店 1979年)で、征矢は編集者として林明子と一緒に仕事をし、以降多くの作品を共に手掛けた。例えば、「はじめてのキャンプ」(林明子/作・絵 福音館書店 1984年)本編は黒のラインと黄色の着色だけのシンプルな絵ながら、子ども達の心の躍動感や豊かな自然の息吹が伝わってくる。その時に担当編集担当だった征矢から飯ごうを手渡されて4日間、まさに作者本人が初めてのキャンプに北海道まで出向き子どもたちと共に過ごした体験が、この絵本の基になっている。キャンプの体験は、最初は絶対にお話を自分でつくるのは無理だと思っていた林明子の心を動かした。お話作りは自由で開放感がある、登場

人物の名前まで決めて自由に動かせる、という躍動感あふれる林明子本人の気持ち、シンプルながらうきうきとした感じや、はらはらした感じのお話と絵につながっていると思われる。

林明子の最新作「ひよこさん」(征矢清／作 林明子／絵 福音館書店 2013年)も、夫となった征矢が作った物語とラフスケッチをもとにイメージを膨らませ、約2年の歳月をかけて描きあげた絵本である。小さなひよこさんは一人でおでかけする。だんだん暗くなってきて星まで出てきて「くらくてもうあるけないよ」ひよこさんは葉っぱをかぶってぐうぐう寝るとそこに誰かががやってくる、「なんだかとてもあったかい」…。幼い子どもはこの絵本を最後までみるとホッとして、読んでいる側も暖かい安心した気持ちになる作品に仕上がっている。

「ひよこさん」は征矢が画面のラフスケッチを描いた。林明子は征矢の残したラフスケッチを基にイメージを膨らませ、家の中は買い集めたひよこグッズであふれるようになった。ひよこに囲まれて制作することでひよこの世界により近づける気がしたのだろうか。林明子は、夜の闇の中でも明るく黄色に輝くひよこさんのふんわりした羽毛の質感にこだわって絵を描いたとのこと。このふんわりした質感が、絵に透明感を与えている。表紙の独り立ちしているりりしいひよこさんと、裏表紙の雄鶏のお父さんが守る家の中でお母さんめんどりの背中に乗って甘えるひよこさんの対比が素晴らしい。

征矢が編集を手掛けた林明子の絵本はのきなみ重要な賞を受賞した。「きょうはなんのひ」が第2回絵本にっぽん賞(1979年)、「おふろだいすき」が第30回サンケイ児童出版文化賞美術賞(1983年)、「はじめてのキャンプ」がフランスの絵本賞(1984年)、「こんとあき」が講談社文化賞(1989年)である。林明子は征矢のことを「編集者としての導き方が本当に上手でした。彼についていけば安心、という気持ちで描くことが出来ました」と述べている。

「こんとあき」のお話が生まれるきっかけも征矢であった。林明子のアトリエで打ち合わせをしているとき丁度林明子の鳥取の祖母から電話が入り、それを聞いていた征矢が「おばあちゃんに会いに行く絵本をつくろう」と提案したという。狐のぬいぐるみをあきのお兄ちゃん役にし、名前を「こん」としたのも征矢である。

V、おわりに～児童文化財である絵本、林作品からその意味を探る～

子どもが絵本を開く時、信頼する身近な大人に絵本を読んでとせがむ時、保育の場で保育者が子ども達と絵本を読み合う時、一人で本を読む力がついて黙々と本の世界を楽しむ時、其々のシーンで、子どもにとって絵本や本の楽しみの一つは間違いなく「絵」と「文」である。林明子は、「子どもは何でも敏感に吸収し心に刻む。だから、絵本の絵や挿絵を描く時は(下線、筆者)最高の絵を描かなきゃという気持ちがある」と述べている。また、「あらゆる角度から人間を自在に掛けるようになり、あらゆる人が美しいと感じる色を使えるようになること、それが夢」とも語っている。また「子どもの心情は(下線、筆者)とても豊かで、喜びも悲しみも全部大きい」とも述べている。

林明子の作品は、どれもが丁寧で心がこもっていて、その絵本を手取る子どもに限らず多くの読者を魅了してやまないのは、彼女の「絵」「文」に対する真摯な姿からではないだろうか。林明子の作品いずれをみても共通する、子どもの心の深いところに響き心が動き心に残る、自分と一体化させることができる主人公がいて冒険がある、子どもが納得出来る結末になっている、という作品作りの信念が見て取れる。読者が誰であろうが、自身の信念のもと絵本を制作し続けるそのまっすぐな姿勢に、児童文化財である絵本の本質を掴んだ「本物」の「良さ」、つまり良書といわれる絵本の神髄がある、と考える。

「絵本だけ、絵本サマサマ、絵本が大好きなのね、わたし」という林明子の言葉が、彼女が絵本に向かうまっすぐなおもいを最も端的に表している。

VI、今後の課題

林明子の作品を、その半生を辿りながら読み解いてきたが、今後も他の絵本作家の作品や半生についての検討を行い続ける必要がある。さらには、児童文化財である「絵本」はどうあったらよいか、その意義を明らかにすることが課題として挙げられる。

年譜

1945年	東京都に五女一男の三女として生まれる(長女は夭折)。
1953年	神奈川県に転居。
1955年	父親に勧められ洋画家・飯島一次の絵画教室に通い始める。クレヨン、水彩、油彩で描くことを学ぶ。
1963年	横浜国立大学・学芸学部(在学中に教育学部に改称)美術科に入学。油絵を専攻する。在学中はデザインクラブ・ラコアに所属し、デザイン科の真鍋一男の薫陶を受ける。
1967年	イラストレーター真鍋博のアトリエに就職。丸ペンの使い方、色指定、描き分け等印刷技術の様々な技法について教えるを受ける。

1968 年	大学の同級生が就職していた縁で、池坊の機関誌「新婦人」（文化実業社）にイラストが掲載される。商業ペースで印刷された初仕事となる。
1969 年	初の海外旅行でヨーロッパを訪れる。ローマ、スイス、ドイツ、アムステルダム、パリ、ロンドンを巡り、観光の合間の自由時間に美術館を巡る。
1970 年	「母の友」1970 年 6 月号、205 号（福音館書店）にイラストが掲載される。今後の長い福音館書店との付き合いの始まりとなった。
1973 年	はじめての絵本「かみひこうき」（かがくのとも 1973 年 11 月号 56 号 小林実／作 福音館書店）刊行。
1974 年	童話「飛べよ、トミー」（児童文学創作シリーズ 飯田栄作／作 講談社）
1975 年	絵本「しゃぼんだま」（かがくのとも 1975 年 4 月号 73 号 小林実／作 福音館書店）
1976 年	はじめての物語絵本「はじめてのおつかい」（こどものとも 1976 年 3 号 240 号 筒井頼子／作 福音館書店）刊行 ポローニャ国際絵本原画展に出品。
1976 年	絵本「ママ あててみて!」（ちいさいえほん 末吉顕子／作 偕成社）
1977 年	童話「しまちゃんちゃん」（文研の創作絵童話 中野みち子／作 文研出版）
1978 年	絵本「はくのはわたしのばん」（かがくのとも 1978 年 1 月号 106 号 神沢利子／作 福音館書店）
1978 年	絵本「もりのかくれんぼう」（末吉顕子／作 偕成社）
1978 年	絵本「くろねこトミィ」（神沢利子／作 ひかりのくに）
1979 年	絵本「あさえとちいさいもうと」（こどものとも 1979 年 5 月号 278 号 筒井頼子／作 福音館書店）
1979 年	絵本「きょうはなんのひ?」（日本傑作絵本シリーズ 瀬田貞二、作 福音館書店）第 2 回絵本にっぽん賞（全国学校図書館協議会／読売新聞社 主催）を受賞。
1980 年	絵本「おでかけのまえに」（こどものとも年少版 1980 年 10 月号 43 号 筒井頼子、作 福音館書店）
1980 年	絵本「おいていかないで」（こどものとも年少版 1981 年 10 月号 55 号 筒井頼子／作 福音館書店）
1981 年	童話「にせあかしあの魔術師」（大日本の創作どうわ 征矢清／作 大日本図書）
1982 年	絵本「おふろだいすき」（日本傑作絵本シリーズ 松岡享子／作 福音館書店）
1982 年	絵本「びゅんびゅんごまがまわったら」（絵本・ちいさななかまたち 2 宮川ひろ／作 童心社）
1983 年	絵本「おふろだいすき」が、第 30 回サンケイ児童出版文化賞美術賞を受賞。
1983 年	絵本「いもうとのにゅういん」（こどものとも 1983 年 2 月号 323 号 筒井頼子／作 福音館書店）
1983 年	絵本「いってらっしゃーい いってきます」（こどものとも 1983 年 7 月号 328 号 神沢利子／作 福音館書店）
1984 年	創作童話「はじめてのキャンプ」（福音館創作童話シリーズ 林明子／作・絵 福音館書店）
1984 年	はじめておはなしも手がけた創作童話「はじめてのキャンプ」がフランスの絵本賞 LE GRANDPRIX DES TREIZE …13 人の審査員による大賞…を受賞。
1984 年	絵本「はくはあるいた まっすぐまっすぐ」（マーガレット・ワイズ・ブラウン／作 坪井郁美／訳 ペンギン社）
1985 年	童話「魔女の宅急便」（福音館創作童話シリーズ 角野栄子／作 福音館書店）
1985 年	絵本「はっぱのおうち」（こどものとも年少版 1985 年 4 月号 97 号 征矢清／作 福音館書店）
1986 年	絵本「まるいちきゅうのまるいちにち」（安野光雅、編 エリック・カール、レイモンド・ブリックス、ニコライ・ポポフ、ジャン・カルビ、レオ&ダイアン・ディロン、朱成梁、ロン・ブルックス、林明子／絵 童話社）
1986 年	絵本「とん ことり」（こどものとも 1986 年 4 月号 361 号 筒井頼子／作 福音館書店）
1986 年	絵本「くつくつあるけ」（くつくつあるけのほん 1 林明子／作・絵 福音館書店）
1986 年	絵本「おててがでたよ」（くつくつあるけのほん 2 林明子／作・絵 福音館書店）
1986 年	絵本「きゅっきゅっきゅっ」（くつくつあるけのほん 3 林明子／作・絵 福音館書店）
1986 年	絵本「おつきさま こんばんは」（くつくつあるけのほん 4 林明子／作・絵 福音館書店）
1987 年	絵本「ふたつのいちご」（クリスマスの三つのおくりもの 1 林明子／作・絵 福音館書店）
1987 年	絵本「ズボンのクリスマス」（クリスマスの三つのおくりもの 2 林明子／作・絵 福音館書店）
1987 年	絵本「サンタクロースとれいちゃん」（クリスマスの三つのおくりもの 3 林明子／作・絵 福音館書店）
1989 年	絵本「こんとあき」（日本傑作絵本シリーズ 林明子／作・絵 福音館書店）
1989 年	「こんとあき」が講談社出版文化賞を受賞。

1991 年	絵本「10 までかぞえられるこやぎ」(日本傑作絵本シリーズアルフ・ブレイク・ブレイク／作 山内清子／訳 福音館書店)
1993 年	絵本「まほうのえのぐ」(こどものとも 1993 年 4 月号 445 号 林明子／作・絵 福音館書店)
1994 年	征矢清 (福音館書店編集部勤務・児童文学作家) と結婚
1995 年	絵本「でてこい でてこい」(こどものとも 0, 1, 2 1995 年 4 月号 1 号 林明子／作・絵 福音館書店)
1998 年	夏、夫の退職を機に長野県軽井沢町に移り住む。
2001 年	童話「ガラスのうま」(征矢清／作 偕成社)
2002 年	童話「ないろ山のみみつ」(福音館創作童話シリーズ 征矢かおる／作 福音館書店)
2006 年	夫の郷里、諏訪湖の畔に生活の拠点を移す。
2008 年	夫、征矢清氏 亡くなる。
2013 年	約 11 年ぶりとなる絵本「ひよこさん」刊行。(こどものとも 0, 1, 2 2013 年 3 月号 216 号 征矢清／作 福音館書店)

註

- (註 1) 林明子は、横浜国立大学教育学部美術科卒業後、1967 年にイラストレーター真鍋博氏のアトリエに就職し、初めはイラストレーターの仕事から歩み始める。
- (註 2) 福音館書店宣伝部の調査による刷数。
- (註 3) 『母の友』は福音館書店が年間、毎月発行している月刊誌で、絵本の話や乳幼児の健康面の記事等、子育ての中での身近な気になることを取り上げて暮らしに活かす記事が多く取り上げられている。
- (註 4) 日本の子ども向け絵本について、よく売れたものをベストセラー、読み継がれているものや重版をしているものがロングセラーといわれるが、その定義とデータの調査方法は資料によって異なり明確な記載がない場合もある。累計発行部数 100 万部を超える絵本を「ミリオンぶっく」と称し、2018 年現在 112 点をトーハンが紹介しており、その約 7 割が創作 (物語) 絵本にあたる。

引用文献

- 1) 青戸泰子・田邊資貴・原田夏帆 (2018 年) 保育・教育現場における絵本尾読み聞かせの意義 関東学院大学人間環境学会紀要 30 号 39
- 2) 同上 43
- 3) 森光義昭・関装聡 (2010 年) 幼児教育における絵本教材化の観点 久留米信愛女学院短期大学研究紀要 33 号 46
- 4) 松岡享子 (2019 年) 「母の友 特集 “面白い絵本ってどんな絵本?”」福音館書店 14
- 5) 同上 16
- 6) リリアン・H・スミス 石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳 (1964 年) 岩波書店
- 7) 生田美秋・石井光恵・藤本朝巳 編著 (2013 年) 「ベーシック絵本入門」ミネルヴァ書房 66
- 8) 同上 73

参考文献

- リリアン・H・スミス 石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳 (1964 年) 「児童文学論」岩波書店
- 松井直 (1984 年) 林明子の絵本、その出発と成長「絵本の時代に」大和書房
- 対談・五味太郎／対談・宮崎駿 (1990 年) 「素直にわがまま」偕成社
- 絵本作家訪問記・林明子さん (1995 年) 「母の友」1995 年 1 月号 福音館書店
- 生田美秋・石井光恵・藤本朝巳 編著 (2013 年) 「ベーシック絵本入門」ミネルヴァ書房
- NPO ブックススタート 編著 (2014 年) 「ブックススタートがもたらすものに関する研究」NPO ブックススタート
- 絵本の引き出し 林明子原画展 展覧会図録 (2017 年) 朝日新聞社
- 藤本朝巳・生田美秋 編 (2018 年) 「絵を読み解く 絵本入門」ミネルヴァ書房
- 松岡享子 (2019 年) 「母の友 特集 “面白い絵本ってどんな絵本?”」福音館書店
- 田中愛 (2015 年) 「絵本作家さとうわきこ研究～童話作家から絵本作家へ～」信州豊南短期大学紀要 (32)

参考サイト

- ウィキペディア ブックトーク
- <http://ja.wikipedia.org/wiki>
- 絵本ナビ
- <http://ehhon-navi.com/archives/123.html>
- 教文館 ナルニア国日記
- <http://www.kyobunkwan.co.jp/narnia/archives/weblog/18>

※本稿は、絵本専門士 5 期生課題「気になっている絵本作家や気になる絵本のテーマなどについて考察し、それについて調べる」の課題のもと、「林明子の世界」と題して書いた原稿を、加筆・修正したものである。

保育における表現活動を創る「ヒト・モノ・コト」に関する一考察

—子ども・保育者・専門講師の協働に着目して—

A Study of what is important
to create expression activities in childcare

—Focusing on collaboration between children, childcare workers, and specialized instructors—

鴨志田 加奈
KAMOSHIDA Kana

I. はじめに

保育における身体表現や劇等の活動については、以前から「指導の仕方がわからない」「どうしても既製の音楽やダンスを真似するだけにとどまってしまう」と言った現場の声を多く聞く。昨今では、環境を通した保育の重要性や子どもの主体性を引き出す保育を意識して様々な工夫がされるようになってきたが、従来から活動に戸惑いが多い「身体表現や劇等の活動」を、環境を通した保育の中で捉え直し構想していくことは、保育現場にとって大変難易度の高い課題とも言える。本研究の目的は、このような現場での課題とそれを踏まえた実践を蓄積し、問題点と可能性を明らかにしていくことである。環境を通した保育のキーワードであるヒト・モノ・コトに着目し、今回は特にヒトに焦点を絞り、筆者が専門講師として活動する「けやの森学園」での2年間の実践を考察し、今後の活動への示唆を得ることができたらと考える。

II. 研究の方法

1. 対象

けやの森学園は、1978年に「けやの森学園幼稚園」を埼玉県狭山市に開園、1999年「自然塾 NPO けやの森自然塾」、2003年「けやの森保育園」を開設し、40年以上に渡り地域の教育・福祉に尽力している。筆者は「けやの森学園幼稚園」「けやの森保育園」の子ども達・保育者と表現活動を行っている。けやの森学園は「生きる力を育む自然の教育」を教育理念とし、多くの体験教育の機会や、子ども一人一人と丁寧に向き合う作品制作や表現発表を行っている。また、これまでも園として様々な研究発表、出版、研修会・講演会の主催、海外研修（フランス フレネ学校）に取り組んでいる。「けやの森学園」のこれまでの豊富な経験や園のクリエイティブな力も借りながら、専門講師として今ある知見を伝達するだけでなく、園と共に協働して新しい表現活動の可能性を探ることができればと考え本実践を行っている。

補足説明として筆者について記す。筆者は、舞台俳優、ダンサーとして約10年間のキャリアを積んだ後、保育者養成校の教員となり、身体表現・演劇的表現系の授業、保育内容表現、表現の指導法などの授業を担当してきた。本研究では、保育における表現活動の新たな可能性を探るべく、これまで習慣的に行われてきた保育における表現活動の枠を超えて、自身の専門分野である身体表現・舞台芸術の観点から、子どもの表現活動を捉えることを意識して実践を行っている。

本稿においては、2019年～2020年12月までの活動についてを対象とする。対象児年齢については主に3、4、5歳児の異年齢クラスが対象であり、場合によっては1、2歳児が対象になる場合もある。子ども達との創作活動は主に5歳児が対象である。園児は、全体で現在63人であり、一般的な園に比べ園児数は少なく、日常から一人一人に対して丁寧な保育を理念を持って行っている。筆者と共に創作に参加する子ども達は活動によって3～30人と幅広いが、一斉活動のような時間もあれば、個別に創作の時間を設けるなど、活動によって関わり方も様々である。

2. アンケートの実施

2019年2月～2020年12月までの活動について対象園の保育者を対象にアンケート調査（図表1）を行った。

対象は園の正規職員10名（園長、理事長含む）である。結果の分析に当たっては、実践者である筆者の省察も含め分析し概念化を行った。

(図表 1)

専門講師と協働して創る表現活動についてアンケート

項目 1：専門講師との活動以前、日常の表現あそびや行事において困っていたことがあれば記述してください。

項目 2：専門講師との活動を通して、表現活動について新しく得た知見や感覚、改善した点があれば記述してください。

項目 3：専門講師との活動を通して、子どもたちの表現や日常に変化はありましたか？

項目 4：子ども、保育者、専門講師が協働して創る表現活動は、どのような効果があると思いますか？

項目 5：専門講師との活動の中で、課題に感じたことや今後の改善につながることを、今後やってみたいことなどがあれば記述してください。

項目 6：自由記述（どんなことでもご自由に記述ください。）

Ⅲ. 研究の経過

筆者とけやの森学園との表現活動は 2019 年から始まった。2019 年 2 月～2020 年 12 月までの活動スケジュールは図表 2 の通りである。この他に、希望者を対象にしたダンスクラブの講師として月 2 回の活動を行っている。保育活動や行事に関わる時期は子どもたちとの活動を概ね週 1 回程度行い、その前後で職員とミーティングを重ねている。

日常の保育や行事に筆者が関わることができそうなタイミングを探りながら経過した 2 年間であったが、夏の「親子のお楽しみ会」秋の「プレイデイ（親子参加型運動会）」年度末の「ひな祭り会（発表会）」、「保育者研修」は 2 回ずつ経験

することができた。

2019 年は、1 年間を通して園の時間の流れや大切にしている事、園の文化を知らながら、筆者の専門性を使って協働できる場面や方法を共に模索していった。予定調和的に決まった年間行事に組み込まれるというよりは、常に保育者と対話をしながら「こんなことできるかもしれませんね」といったお互いの感性や自由度を大切に、様々な活動に挑戦した。そのような継続的な対話を通して信頼関係を深めていくことが出来た。

2020 年は、新型コロナウイルスの影響を受け、園も様々な工夫が求められる 1 年となった。工夫の一環として休園期間に園から家庭に向けて動画配信が行われていたが、その一つとして筆者が振付をした親子で楽しめるダンスを保育者と共に踊り、映像編集を行い家庭に向けて配信した。また、例年は屋内で行う作品展を林（屋外）で行なった際に、影を使った身体表現パフォーマンスを子どもたちと行うなど、2020 年特有の状況下における工夫の中で新しい試みが生まれた。

ここでは、1～5 のそれぞれの活動について活動内容を報告する。

(図表 2)

2019 年 2 月～2020 年 12 月までの活動スケジュール		
2019 年		
2 月 12 日	ひな祭り会表現指導	
2 月 26 日	ひな祭り会表現指導	
3 月 2 日	ひな祭り会	
8 月 27 日 (火) 9:00～15:00	親子の会お楽しみ会「染めた布で踊ろう」講師	
9 月 10 日 (火) 15:00～16:00	保育者研修講師	
	演者と観客のイメージの力で創る劇空間～布を使った演出ワークショップ～	
9 月 24 日 (火) 9:45～13:00	年長児表現発表指導	
10 月 4 日 (金) 9:45～13:00	年長児表現発表指導	
10 月 5 日 (日) 9:00～15:00	プレイデイ (運動会) 表現指導・来賓として参加	
10 月 29 日 (火) 9:00～15:00	公開保育	
1 月 21 日 (火) 9:30～11:30	ひな祭り会表現指導	
1 月 28 日 (火) 9:30～11:30	ひな祭り会表現指導	
2 月 4 日 (火) 9:30～11:30	ひな祭り会表現指導	
2 月 4 日 (火) 14:00～17:30	保育者研修	
	演者と観客のイメージの力で創る劇空間～パネルを使った劇進行と演出についてのワークショップ～	
2 月 18 日 (火) 9:30～11:30	ひな祭り会表現指導	
2 月 24 日 (月・祝日) 9:00～15:00	ひな祭り会	
	ひな祭り会 (表現発表会) 総合演出・職員指導、子ども達と共にダンス創作	
	2 月 24 日の表現発表会に向けて、3・4・5 歳児合同クラスの 2 つの劇発表の総合演出と指導、年長児個人発表のダンス創作を 3 人の園児とともにこなした。発表当日は、私自身も身体表現を行う。	
2020 年度		
5 月 28 日 (木)	youtube 動画	新型コロナ自粛期間中オンライン配信 親子で踊ろうどれみの歌 振付
8 月 25 日 (火) 9:00～15:00	親子の会お楽しみ会「染めた布で踊ろう」講師	
9 月 15 日 (火) 9:00～12:00	年長児表現発表指導	
9 月 29 日 (火) 9:00～12:00	年長児表現発表指導	
10 月 6 日 (火) 9:00～12:00	年長児表現発表指導	
10 月 10 日 (日) 9:00～15:00	プレイデイ (運動会) 表現指導・来賓として参加	
10 月 29 日 (火) 9:00～15:00	公開保育	
11 月 24 日 (火) 9:00～19:00	作品展影パフォーマンス	年長児表現発表指導・林視察
12 月 1 日 (火) 9:00～15:00	作品展影パフォーマンス	年長児表現発表指導
12 月 5 日 (土) 16:00～19:00	作品展影パフォーマンス	

1. 親子のお楽しみ会

夏休みの親子のお楽しみ会の表現講師として関わった。このお楽しみ会は、夏らしい開放的な表現遊びを行ったり、流しそうめんを楽しんだりする幼稚舎の夏休みの恒例行事である。筆者の役割は、保育者と共に身体表現遊びの企画を考案し計画を立てること、音源の制作、当日の身体表現遊びのファシリテーションを行うこと、ダンスのデモンストレーションを行うことである。

2019 年の活動では親子で大きな一枚布を染め、その鮮やかな色合いを楽しむことや、布を使って屋外で音楽に乗って

親子で開放的に身体表現を楽しむことなどをねらいとした。(写真1)

2020年は、前年度の活動をさらに発展させ、造形技法であるデカルコマニーを使って虫や生き物の羽を作り親子でストーリーのある劇遊びに挑戦した。

どちらの年度も、保護者のみのダンスワークショップを企画し、筆者が振付した簡単なダンスを外で開放的に楽しみ、子ども達に発表する時間も設けた。

子どもの表現発表を保護者が見るだけでなく、保護者や保育者といった身近な大人が心身を開放して表現する姿を子どもが受け取る機会を作ること、表現活動の応答性や相互性を引き出すことができ「この瞬間を心身で感じ、共に楽しむ」ことに近づけたのではないかと考える。



写真1 2019年親子のお楽しみ会 布染め

2. 秋のプレイデイ（親子参加型運動会）

けやの森学園では、秋に行うプレイデイ（運動会）の中で身体表現を使った自由表現を年長児を中心に行っている。内容は、春夏で体験してきた山、川、海での自然体験で感じてきた事を身体を使って表現するといったものである。毎年、子ども自身が体験を振り返る中で伝えたいと思った事や、保育者が読み取っていた子ども一人一人の成長のエピソードを重ねながら作品を作り、プレイデイの1演目として園庭で発表している。

2019年は、担任保育者と年長児で考えたシナリオをもとに、筆者は子どもたちのイメージが動きとして表現されやすくなるよう言葉がけを行ったり、道具の工夫を提案したりした。また音楽についてもシーンごとのイメージを深めるようなBGMを多様なジャンルから保育者と共に探し、音楽からも想像力を刺激できるよう試みた。また、波間をカヌーで抜けていくという表現の際に大布を波に見立てて使い、子ども達の空間イメージを広げる工夫をしたが、屋外の風や砂の影響で想定外の事もあり、園行事としての表現活動について筆者が知見を広げる必要を感じた。

2020年は、前年よりも早い段階から子ども達との作品作りに加わり、身体表現・シナリオ・音楽・道具等を保育者や子ども達に混ぜて共に考えることができ、作品創作のファシリテーションを行うことができたと感じる。また、子ども達と共に筆者も身体表現をしていたところ、筆者も共に表現する方が子ども達のイメージを刺激する環境になるのではないかと保育者の声を受け、一緒に作品に出演することになった。本番では子ども達と表現を楽しみつつも、主役の子ども達の表現を壊さず、引き立てる存在でいられるよう立ち位置や自身の表現の規模に常に注意を払って参加した。また、2020年は園の方から「全学年が登場するようなみんなで自由表現を行いたい」という提案があった。コロナ禍だからこそ、皆で集う楽しさや、心を合わせる喜びを全身で子ども達と共に体感できるような行事にしたいという園長からの提案であった。提案を受け筆者は「みんなで」をキーワードにするために、表現空間の環境構成にこだわった。正面にこだわらずに自分達の表現を見合いながら楽しめるよう、円形舞台のような演出を試みた。練習や本番に限らず、表現に対する緊張感というよりは、みんなでその場の高揚感を楽しむといった雰囲気が子ども達・保育者の中に生まれていたように感じた。(写真2)



写真2 2020年プレイデイ自由表現 海の生き物

3. 公開保育

年間10回程度行われる公開保育の内の1回を筆者が担当し、1・2歳児、年少、年中、年長のクラス毎に展開する表現遊びを2019年度、2020年度に行った。発達段階や普段の保育の様子を聞きながら筆者が活動を準備し進行を行う。保育者は子どもと一緒に活動に参加し補助をしてもらっている。1年目は様々な布を使って子ども達のイメージを引き出しながら行う身体表現遊び、2年目は、園が日常より使用している林を活動場所とし、屋外の自然空間を舞台に劇遊びを行った。保護者のコメントには、「子ども達が物語の世界にすっと入り込んでいく様子に驚いた。」「普段と違った我が子の新たな一面を発見した」というようなコメントが多く寄せられている。また、公開保育の園側の意図としては、日常から保育者と子ども達が対話しながら作り上げる保育の形を保護者に見てもらい、その意義について理解を深めてほしいという願いがある。それに関係する保護者アンケートには、「その場で子ども達の意見を聞きながら臨機応変に対応し、子ども達と一緒に表現を形にして先生方の関わり方がすごいと感じた」といった声が聞かれ、保育内容や保育者の関わりについ

でも、保護者の気づきを促すきっかけになっていると感じる。

4. 生活作品展（影のパフォーマンス）

2020年は新型コロナウイルスの影響で、例年は屋内で行う作品展を林（屋外）で行った。2019年は作品展には関わらなかったが、この状況下だからこそ屋外での活動に新たな可能性を探ってみたいという園側からの提案で、影を使った身体表現パフォーマンスを夜に屋外で行うことになった。夏に行ったキャンプの際に夜に大布をライトで照らして昆虫採集をした時の幻想的な雰囲気から保育者達の中で「夜に影のパフォーマンスを林で出来たら面白いかもしれない！」とアイデアが閃いたということであった。2020年になってから、園側からこんな事をやってみたいと提案を受けることが増え、そのような提案に筆者も刺激を受け協働的な創造活動がさらに深まっていった。実際に目の前の子供達にとってその提案が適するものなのかを常に考えながら、その時々クラスの様子や一人一人の子供の様子を含めて活動を練っていった。影のパフォーマンスの導入として、日常の保育の中で影遊びを楽しむ機会を設けながら進めたり、練習を重ねるといったよりは、子供達が影と戯れながら即興的な身体表現を楽しみながら作品作りができる事を大切に、即興表現がしやすいストーリーや構成の骨格を保育者と筆者とで整え、子供達との創作の時間を迎えた。すると大人が予想していたイメージと違った子供達独自のアイデアも見えてきて、がらりと雰囲気を変え作品を創作することになったが、子ども・保育者・筆者のイメージが集まり化学変化を起こしながらの創作はとても創造的なものとなった。また、音楽についてはその場で子供達と共に色々な音源で即興表現をしてみながら「この方が怪しい感じでいいよ!」「これはヘビっぽいい!」など音と表現のイメージをすり合わせながら決めていくことができたため、今まで以上に子供達のイメージを作品に落とし込むことができた。そのような過程もあって、当日の受付やお客さん（保護者）の案内役を子供達がやりたいという声も上がり、自分達のパフォーマンスを自分達でプロデュースし責任を持って取り組むといった姿が見られた。影のパフォーマンスという非日常的な魅力や、影という形で自分の表現が目で見え、即時的なフィードバックがあることが面白く、さらに工夫や創造を繰り返しやすいといった影そのものの特性が意欲に繋がったとも考えられる。筆者は、魔法の役で登場し子供達と同じイメージの中で身体表現を行いながら、子供達の素朴でユーモラスな表現がスムーズに進むよう合図を送ったり雰囲気づくりをした。保育者はナレーターを務め、進行役として声で表現に参加した。

保護者や来場者のアンケートには「子供達の表情が、指先からからだ全体のしなやかな動きとなって写し出され、夜の林の光と影の美しさを感じることができた。」「ここに至るまでのやりとり等の濃い時間も凝縮されて表現されているように感じた。」「シルエットだけというシンプルさにより、一人一人の内側からのものが際立って伝わってきたように感じました。」「影絵の表現では、子供達の動きに釘付けです。思いもよらない表現活動を見て、絵を描く、作品を製作する、身体で表現するとすべてひっくり返るための作品展なのだと感じました。」など、多くのコメントが寄せられた。子ども、保育者、筆者の創造的活動が、子供の周りにいる大人達の創造性を刺激するような機会となったと感じる。(写真3、4、5)



写真3 2020年 影遊び



写真4 2020年作品展影のパフォーマンス



写真5 2020年作品展影のパフォーマンス

5. ひな祭り会（生活発表会）

2019年のひな祭り会から活動に参加しているが、1年目は園との関わりが始まって間もない時期であり、子ども達と関わるというよりは、自身がパフォーマーとして1分程度参加する形であった。2020年、2021年は日常的な表現活動における関わりが持てた状態で、ひな祭り会の創作に関わっている。けやの森学園のひな祭り会は、表現発表会であり、毎年2歳児の発表、3・4・5歳児の異年齢クラスの劇発表、5歳児の個人発表が行われる恒例行事である。異年齢クラスの劇発表は、年間の活動を通して子ども達が興味関心を持ってきた事を軸にし、保育者と子ども達でオリジナルの劇を創作していく活動である。テーマやストーリーは保育者があらかじめ構成し子ども達に投げかける形であるが、日常の子ども達の様子を観察、記憶、記録した保育者が考えたよく練られた構成であり、子ども達自身も自分たちの劇として愛着を持って取り組んでいるように感じる。台詞についても自分で調べた事を紹介するような場面等があり、自分の発表に主体的に取り組む姿が見られる。

2020年は保育者と子ども達である程度劇の形が出来上がってから参加する形で、演出の工夫などについてアドバイスを行った。また職員研修の依頼を受け、劇の進行や演出方法についての研修会（演者と観客のイメージの力で創る劇空間～パネルを使った劇進行と演出についてのワークショップ～）を行い、何かを過剰に付け足していく演出ではなく、演者と観客のイメージする力を助長するようなシンプルな演出について紹介した。個人発表では、毎年子ども達が自分で選んだ発表（例：縄跳び、太鼓、ひな祭りの舞踊、マジック、調べ発表 等）が行われるが、2020年からダンスという選択肢を設けた。ダンスを希望した2名の年長児と一緒に、それぞれのソロのダンスを創作発表した。対象児のイメージを聞いたり、引き出したりしながら筆者と共に1分程度の振付を完成させた。子ども達は「こうやってくるくる回りたい」「夏のイメージで元気を届けたい」等、自分のイメージを積極的に伝えてくれた。子ども一人一人とじっくり向かい合いながら共創する過程は、筆者にとっても学びの多い活動であった。また、それぞれの子ども達の普段の様子も含め保育者と話をし、日常の子ども達の課題も含めダンス発表の進め方や意味を探りながら創作を行った。保護者アンケートには「各々の個性にすごくあった表現になっていたと思いました。」「それぞれの子どもの特徴を理解し寄り添う、けやの森らしさ全開の発表だったと思います。」等の声が聞かれた。

2021年は現在創作過程である。例年は地域のホールで発表を行っていたが、2021年は新型コロナウイルス感染症対策としての工夫として、園内のホールを活用して発表を行うことになった。運動会の自由表現でも取り入れた正面を意識すぎない表現空間の工夫を行う。対一般的な劇場空間（演者と観客が真正面から向き合う形状）ではなく、円形劇場のように劇空間を変化させて行う予定である。劇中の子ども達同士のコミュニケーションを感じやすいのではないかと、また劇遊びの延長線上のような感覚になり、発表に執着せず、表現そのものを楽しむことができるのではないかと仮説を立て、研修会や対話を重ねながら筆者と保育者で構想を練っているところである。（写真6、7、8）



写真6 2020年ひな祭り会個人発表練習



写真7 2020年ひな祭り会個人発表衣装にワクワク



写真8 2021年ひな祭り会個人発表創作中

IV. 結果

保育者対象に行ったアンケートの項目ごとに同様の内容が多かった記述や特徴的な記述について整理したものを示す。（図表3～）保育者全体で共通に感じられていると考えられる事項について概念化を試みた。概念化にあたっては、本活動における実践者でもある、けやの森保育園園長にもご協力いただいた。

(図表 3)

項目 1：専門講師との活動以前、日常の表現あそびや行事において困ったことがあれば記述してください。

「パターン化・マンネリ化」

- ・毎年同じようなイメージの偏りがあったのではないかと（選ぶ曲や構想が）
- ・曲や動きがワンパターンになってしまう
- ・新しいものを取り入れたいと思ってもなかなか良いものに出会えない
- ・企画、構成、表現方法のマンネリ化

(図表 4)

項目 2：専門講師との活動を通して、表現活動について新しく得た知見や感覚、改善した点があれば記述してください。

「演出やステージングについての知見に広がり」

- ・空間の使い方
- ・パネルや布を使った演出方法
- ・第三者への魅せ方、演出方法
- ・新しい演出方法で表現の幅が広がる
- ・表現の方法の豊かさが格段に上がった
- ・空間上での用具、素材の活かし方

「音楽の効果や自由な選曲についての気づき」

- ・乳幼児向けの歌にとらわれない様々な分野の選曲
- ・音楽・効果音の選曲（毎回その世界観やイメージにハマる選曲）
- ・選曲、振付全てが今までとは異なるものになり、ダンスではなく「身体表現」という言葉がぴったり当てはまると感じている
- ・音楽との相乗効果

その他

- ・表現するもののイメージをしっかり持って表現の芯を決めておけば、そこから自由な発想で子ども達と考えていってもブレずに自然と動きや目線が決まっていき、とってつけたような表現にならない
- ・子どもにとっても保育者にとっても身体表現が、楽しんで、表現したくて、伝えたくてという意識で行うものになった

(図表 5)

項目 3：専門講師との活動を通して、子どもたちの表現や日常に変化はありましたか？

「今まで以上に日常から表現を楽しむ姿」

- ・日常から身体を動かすことが好き、音楽が好きな様子が表れるようになった
- ・表現活動での動きを遊びの中でも取り入れながら自分たちで身体を動かして楽しんでいる
- ・元々好きだった空想ではあるが、これまで以上にその世界に浸っている

「自分を表現するきっかけになっている」

- ・認められることで花開いたような子どもがいる
- ・普段あまり意見しない子も、表現の場となると鴨志田先生の動きやアドバイスからインスピレーションを受けて、自分なりの表現を楽しんでいる姿が見られた
- ・表現の楽しさを知り、今まで表現に積極的ではないと思っていた子も表現が好きになった様子がある

「モデルとしての影響」

- ・本物の動きを見て触発され、自分も同じように動けるように感じ意欲的になったり、イメージをはっきりと頭に描いて演じられるようになったりしていると感じる
- ・プロの姿を見る子どもの憧れの目線が凄い
- ・幼少期に本物との出会いがあるというのは幸せ
- ・鴨志田先生の真似をしたくて表現が豊かになっているよう感じた
- ・鴨志田先生や踊っているお兄さんお姉さんを見て 2 歳児が目輝かせている

「非日常や特別感」

- ・いつもとは違う特別な時間にいるという喜びを感じていると思う
- ・非現実を堪能していると感じる
- ・一人の子どもの中にも様々な側面がある
- ・自分の普段の様子を知らない大人にだからこそ、普段を切り離して心から自由に表現できるという場合もあるのではないか

(図表6)

項目4：子ども、保育者、専門講師が協働して創る表現活動は、どのような効果があると思いますか？

「保育者の考え方の幅が広がる」

- ・ 日常の自分の固定概念に縛られない「こんな可能性もあるんだ」という提示をしていただけるので、保育者の考え方の幅が広がり独創性があるものができるのではない
- ・ 思いつかないような演出や構成で、思い描いていたものが形となっていく
- ・ 保育者視点のみの偏った保育内容からの脱却

「創造の喜びを味わう、挑戦・意欲」

- ・ それぞれが違う視点を持っていて、考え合わせていくことで、モノを創っていく喜びが倍増する
- ・ 職員も新しいことに挑戦する意欲や楽しさが増した
- ・ 新たな発見や刺激をもらい表現する楽しさを保育者も子どもたちもより感じている
- ・ 保育者も「こんなやり方でもできるのでは？」と新しい方法へのチャレンジ欲も高まったと思う

「保育者の緊張感が緩まる・安心する」

- ・ 自分自身の変な力が抜けてより表現が楽しくなった
- ・ 保育者は専門家にアドバイスをもらうことで安心して集中して表現活動を行える

「子どもに対する新たな発見」

- ・ 子どもの日常とは異なる良い面（今まで気づかなかった魅力）が表れたり、新たな発見がある
- ・ 違う視点から見た時、新たな子どもの魅力の発見があり、またそれが促進されていく
- ・ 子どもの成長に対する課題への違う方向からのアプローチ方法の発見になった

「子どもの表現を魅力的に表現できる、子どもの創造性に対する保護者の気づき促進」

- ・ 子どもの思いが素敵な形になるというところ、子どもの思いが具現化できることは子どもにとってもすごく嬉しいことであり、それが見ている人の感動につながるところがよい
- ・ 子どもの状況を知っている保育者、子どもの表現を魅力的に引き出し演出する方法を知っている専門家がマッチングすることで、本人・友達・保護者・保育者、誰が見てもその子が輝く表現となり、高い満足感が得られる
- ・ 我が子のみではなく、全体を感じて評価する保護者の視点の変化、満足度の増加

(図表7)

項目5：専門講師との活動の中で、課題に感じたことや今後の改善につながることを、今後やってみたいことなどがあれば記述してください。

課題

「保護者からの高まる期待と目の前にいる子どもにあった表現のバランス」

- ・ 保護者からの期待が高まっていることをひしひしと感じる
- ・ その年々の子どもたちの様子やその子たちにあった表現を伝えられたらいいと思う（バランスが大事）
- ・ 第三者的な冷静な視点を持ち、演出しすぎないように気をつけたい
- ・ 子どもの素朴さ、純真さ、素直さがそれによって消えないように、効果的に活用すること
- ・ 新しい手法や表現方法により、表現は創造的に進化した、保護者の期待は高まる一方。表裏一体である。

やってみたいこと

- ・ 活動記録を残し、広く知らせていく
- ・ 1、2歳児の表現遊びの充実
- ・ 様々な音楽ジャンル（ワルツ、ブルース、ジャズなど）をリズムの刻み方や表現方法を知りたい・やってみたい
- ・ 音楽選びのポイントを学びたい
- ・ 影の表現をもっと多く取り入れてやってみたい
- ・ 自然現象を活かした表現
- ・ 子どもの創作物（造形作品）とのコラボレーション

V. 考察

アンケート結果の内容を拠り所に、4つの観点から意義と課題を検討する。

1. 保育という固定概念に縛られない表現の発見

アンケート項目1の表現あそびや活動における困りごととして多くの保育者が感じている内容が、「マンネリ化・パター

ン化」であった。それが、筆者との表現活動を継続する中で、知らず知らずに作り上げていた自身の固定概念に気づき、表現活動や創作活動はもっと自由でいいのだということを発見することができたという。特に「音楽の効果や自由な選曲についての気づき」についてはコメントも多く、普段の会話の中でも筆者の選曲や効果音などの使い方に興味を持ってくることが多かった。舞台芸術の作品作りでは、そのシーンに合わせた効果音や楽曲の選択について、かなり慎重に選択し、音を流すタイミングや音の切り方についても繊細な配慮をする。音は表現の雰囲気大きく影響を及ぼす為、その影響を効果的に使う必要がある。そのような観点で筆者がシーンに合わせて様々なジャンルの楽曲を提案することは、今まで「子どもの活動には子ども用に作られた曲から選曲する」といったような固定概念を持っていた保育者からすればとても新鮮だったようだ。また、音をブチ切りにせずフェードアウトしながらその中で場面転換をすると物語の余韻が残る、といったような様々なアドバイスをし、その効果を実感することで、保育者自身の音への興味がさらに広がっていったのではないかと。

音だけでなく「演出やステージングについての知見に広がり」についても多くの記述があった。シーンごとに暗転にし舞台上のセッティングを入れ替えるような場面転換の必要性について話し合ってみたり、子どもたちや見ている人の想像力を使って布や空間に工夫を行うことで、十分にシーンのイメージが表現できる演出方法についての職員研修を行いながら、これまで定型で行ってきた方法に新しい考え方を提案することは、筆者自身の挑戦でもあった。しかしけやの森学園の保育者は、いつも新しいものに対し興味を持って向き合い、その演出の意味や効果についてすぐに理解し吸収消化してくれた。そして、すぐさま自分たちの活動の中で活用していく様子から園自体が持つ創造性は非常に高いものであると改めて感じた。これからは筆者も自身の固定概念に疑問を投げかけながら、共に創造性を高め活動を継続していきたい。

2. 保育者自身が生き生きと創造を楽しむ

「創造の喜びを味わう、挑戦・意欲の向上」

上記1.にあるように、保育者の思う表現の枠や自分自身の固定概念から少しずつ自由になっていく中で、保育者自身も創造的な活動にワクワクと心を動かし、さらにそのような状況を喜んでいることが読み取れた。「新たな発見や刺激をもらい表現する楽しさを保育者も子どもたちもより感じている」「保育者も『こんなやり方もできるのでは?』と新しい方法へのチャレンジ欲も高まったと思う」など多く記述が見られた。新しい方法や視点に触れることで、保育者自身の創造性を刺激することができていたと考えられる。

また「保育者の緊張感が緩まる・安心する」にあるように、今まで自分たちだけでどうにかしなくてはと頑張っていた状況であったが、専門講師が協働することで保育者に安心感が生まれ、力みが軽減していたようである。創作活動において心の余裕はとても大切である。特に保育中の創作活動は、一般的には子どもと保育者の間のやり取りで行われていく。保育者は子どもの主体的な思いを読み取り寄り添いながらも、保育者が思う子どもへの願いを織り交ぜながら、作品を作っていく。しかし現実的には、表現活動以外の生活の援助、さらには園の運営…と業務は多岐にわたることを考えると、時間的にも精神的にも余裕を持つことが難しい現状が見えてくる。そこへ筆者のような専門家（第三者）が加わり、子ども・保育者・専門家とのトライアングルができることで、ゆとりや緩みを生み出すことができていたようである。筆者のような外部人材が保育活動に加わることで、表現についての専門的知見の提供以外にも「保育者の緊張感が緩まる・安心する」という効果が期待できることがわかった。

目の前の大人がゆとりを持って生き活きと創造的に活動していることは、子ども達にとって大きな意味を持つ。なぜなら保育者も含めた環境、空気感が子ども達の創造性や主体性を涵養していく大きな要因になるからだ。そういった意味でも「保育者自身が生き活きと創造を楽しむ」ということについて、今後さらに意識して活動を展開してみたいと考える。

3. 子どもにとっての非日常的な環境・人的環境の意義

上記2.で述べた「子ども・保育者・専門講師とのトライアングルができること」は、子ども達にとっても影響を与えているようである。「普段あまり意見しない子も、表現の場となると鴨志田先生の動きやアドバイスからインスピレーションを受けて、自分なりの表現を楽しんでいる姿が見られた」「表現の楽しさを知り、今まで表現に積極的ではないと思っていた子も表現が好きになった様子がある」といったアンケート記述から筆者の存在や本実践の活動が「自分を表現するきっかけになっている」ことが読み取れる。「一人の子どもの中にも様々な側面があり、自分の普段の様子を知らない大人にだからこそ、普段を切り離して心から自由に表現できるという場合もあるのではないか」という保育者の記述も参考になる。普段から保育者とよく話題になることでもあるが、「非日常や特別感」が子ども達を刺激する一つの要素であることは事実である。日常の生活にいない人物は子どもにとって存在自体が新鮮であり、保育者とはまた違う関係性を持つことができるのだろう。

また、保育者・筆者がそれぞれ違った専門的視点から対象児の姿について意見交換すると「子どもに対する新たな発見」に繋がることも多い。「違う視点から見た時、新たな子どもの魅力の発見があり、またそれが促進されていく」「子どもの

成長課題に対する違う方向からのアプローチ方法の発見になった」という記述も見られた。

保育者と筆者の対話を深めることや、日常と非日常のそれぞれの役割を持って子どもと対峙することで、表現活動が子どもの成長に結びついたものになるのだろう。専門講師の存在や活動はやり方によっては、レクリエーションのように一過性の楽しみで終わってしまうこともあるが、保育者と専門講師がお互いの専門性や子どもにとっての役割を理解して、柔軟に意見交換し協働できるかがこのような活動を有意義なものとする鍵となると考える。

4. 課題～創造と期待は表裏一体～

創造は新たな期待を招くものではある。その為、創造的活動において他者からの期待感と自身の想いの間で葛藤する過程はつきものである。そのような意味で、保育の現場においては「保護者の期待」というものが大きく意識されやすいのだとアンケートからわかった。

このようなアンケートの声を受け、保育の現場に求められる創造とは何かを見極めていくことが大切であると感じた。まず、保育の中の創造的活動の基盤は、子どもも保育者も専門家も、一人一人が心を動かすことを楽しみ、挑戦したり、達成感を味わったりすることにある。そしてその経験をもとに深い対話を積み重ねることで、大人も子どもも互いを知り、それを喜び合いながら何かを形作っていくことが保育における創造であると考えている。何か特別なことを行うこと自体が創造ではない。であるならば、子ども・保育者・専門家で行う創造的表現活動において演出をするということの目的についても、子どもの本来持っている純粋無垢な表現をさらに輝かせるためのものであるという認識で、筆者と保育者、そして保護者が共有することが大切である。保育者の記述の中にもそういった方向性を忘れてはいけないという言葉があり、今後は創作の中で意識的に「何を大切にしたいか」について立ち戻って対話する機会を設けていきたい。何か特別なことを毎年足し算していくのではなく、目の前にいる一人一人と毎回新鮮な気持ちで向かい合い、本当にその子どもの心が輝く瞬間を創り合っていくことが保育における創造であり、演出の役割なのだ。

演劇の世界の演出には様々な考え方があるが、特に内面の感情やイメージやコミュニケーションを大切にするような作品作りにおいて多くの人が心に留めていることがある。それは、物語や表現にとって意味のない華美な装置や小道具・大道具はなるべく使用せず、よりシンプルに表現者そのものを引き立たせるのが洗練された演出であるという考え方だ。そのような演劇の本質的な考えに立ち戻り、子どもたちの表現について考えていくと、子どもの内面イメージを膨らませ、引き出すために意味を持って行われるものが演出の目指す方向であると言える。(例えば：移動は役の意味のある行動として意味づけられるものである、セリフを伝えたい相手に向かって話せるようにする、子どもが役の動きや性質を意識しやすいような衣装などの工夫をする、表現の空間を意識しやすいように空間演出をする等)

保育における劇活動にはこれまで保育文化の中で培われてきた定型が存在しているように感じる。装飾の量や見た目の派手さが表現の評価に比例するような「新しいものをプラスしていく」という考え方は、保育者の負担も緊張感を一つの要因になっているとも考えられる。今一度、子どもの純粋無垢な表現のシンプルさに立ち返り、子ども達の表現活動について再考する際、演劇本来の姿をヒントに学びほぐしてみることで、表現活動の新たな可能性を探ることができるのではないかと考える。

Ⅶ. まとめ

表現活動を創る「ヒト」に着目してけやの森学園の専門講師としての2年間の実践を振り返り、アンケートから考察を行うことで、次の展開に繋がる示唆を得ることができた。特に、保育者への影響については自身の予想を超える反響があったように思う。保育実践の効果は、もちろん子ども達が対象になるものであるが、それを支える大人が生き生きしていることの重要性を知ることができた。そして、保育者と専門講師が信頼関係を持って対話できる関係性があってこそ、このような活動は成り立つものであることを実感した。また、専門講師と保育者の役割分担によって、子どもと保育者の関係性や保育者自身の心に「程よいゆとり」が生まれ、子どもの新たな一面が引き出されたり、保育者が安心感を持って活動できる要因になることもわかった。

そして課題である「創造と期待のバランス」については、何かをプラスする方向ではなく、子どもの純粋無垢な表現を大切にしたい無駄のないシンプルさを追求するという共通認識を持って協働していきたいと考える。もう一つ重要な視点として、日常の豊かな実体験が存在することは、けやの森学園の大きな特長であり、この実体験こそが子どもの表現や創造性の土壌であるということであることを忘れてはいけない。そのような体験を、筆者も共に行ってみる等の工夫によって、また新たな展開が期待できるかもしれない。今後も「ヒト・モノ・コト」を手掛かりに一つ一つの表現活動を様々な視点で省察しながら、丁寧な実践を繰り返していきたい。

参考文献

- ・清水裕之(1985)「劇場の構図」, 鹿島出版会

- ・佐藤朝代（2013）「自然の教育 カリキュラム 年中編 不思議の心を膨らませる」．ひとなる書房
- ・小笠原文（2019）「現代フランスにおける乳幼児期の芸術活動・芸術教育―実践事例から考える子どもの美的経験―」．美術教育学研究 第51号
- ・佐藤哲夫・磯部征尊（2014）「芸術家と教員のコラボレーション授業によって生まれる子供の芸術的気づき―「水と土と芸術祭 2012」こどもプロジェクトの事例―」．新潟大学教育学部研究紀要 第7巻 第1号

謝辞

本研究にご協力くださいました、けやの森学園の先生方に心より感謝申し上げます。

保育内容「環境」と「表現」に繋がる“秘密基地づくり”遊び —自然と関わる学び—

Building a secret base play linked to “environment” and “expression” in childcare
—Play with nature—

山村学園短期大学子ども学科
巢 立 佳 宏
SUDATE Yoshihiro

山村学園短期大学子ども学科
酒 井 誠
SAKAI Makoto

1. はじめに

近年では保育所不足や待機児童が社会的な問題となっている。保育所が多く開設される中、広い園庭を確保することや日常的に多くの自然と触れ合う機会が減っているのではないだろうか。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され、2018年4月より施行された。そして、幼保連携を目的として策定された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」^(註1)が示された。

10の姿において、“自然との関わり・生命尊重”があり、自然の中での保育・教育は非常に重要である。こうした10の姿に加え、保育には5領域と呼ばれる「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」がある。保育所保育指針ではこの5つの領域ごとに、それぞれ保育の指標が示されている。保育の5領域に関しても自然との関わりは重要視されている。

幼稚園教育要領においても「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められる」と述べられている。また「内容の取扱い」において各5領域について述べられ、領域の表現では「豊かな感性を養う際に、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにする」など自然との関わり的重要性が挙げられている。

本学は埼玉県中西部の比企の丘陵にあり、里山などの自然にあふれている。この自然環境を活用し、学習ゼミの授業にて教員と学生が協働しながら“秘密基地制作”を行っている。

秘密基地とは、尾方（2012）は辞典には載っていないが、「一般的には『子どもの頃の遊び場』『造形的な遊び空間の総称』として広く認識されている」としている倉田ら（1999）は秘密基地について、保育園の死角になる場所のテラスとフェンスの150「cm」^(註2)程の間に竹を5本渡し、その上に板をのせて屋根を作り、テーブルをはさんでイスが向かい合い、食器類の置いてある場所を“秘密基地”と称し、紹介している。

秘密基地を制作することは保育において様々な実践例があるが、具体的に保育における5領域とどのように関連しているか論じている研究は少ない。そのため、秘密基地の制作が子どもにとってどのような意味を持つか研究する意義がある。

本研究では、5領域の中でも特に「環境」「表現」に着目し、学生と教員による協働して行う“秘密基地づくり”を通して、保育における自然との関わり的重要性について検討していく。

2. 方法（“秘密基地づくり”の授業内容と制作過程）

授業の一環として行っている“秘密基地づくり”の内容に関して、検討を行う。また、“秘密基地づくり”が保育の5領域とどのように関連しているか考察を行う。保育における自然との関わりについて今後の課題の検討を行う。

1) 学習ゼミの受講者

1年生10名、2年生10名、計20名である。

2) 授業実施日及び授業内容

2020年9月23日(水)、9月30日(水)、11月4日(水)、11月25日(水)、12月16日(水)の計5日間に主な活動を行った。各回終了後、次の活動までの間に、グループごとに課した作業を個々で完了させる形式で活動を行った。詳細は以下の通りである。

- 9月23日(水) 打ち合わせ後、秘密基地設置場所を検討するためフィールドリサーチを行った。
- 9月30日(水) 秘密基地設置場所に基地を設置するため、基礎の制作を行った。基礎を設置する場所がなだらかな坂になっていたため、水平をとる穴を掘り、コンクリートブロックを敷き詰め、その上に木材を設置した。
- 11月4日(水) 2グループに別れ、壁パーツ設置班と天井パーツ制作班を作り、各々の作業に移った。壁パーツ設置班は前回設置した基礎の上に壁を建てるため、前回ゼミ後に制作した4面分の壁パーツを協力して現場に搬入後、組み立てを行った。その後、防虫、防腐効果のある塗料を組み立てた壁骨組みに塗布した。天井パーツ制作班は、天井骨組みに張り込む透明ビニールシート(2000mm×2000mm)にカラーセロハンを貼り付けるため、セロハンのカットから装飾までを行い、制作を行った。
- 11月25日(水) 前回建てた壁の骨組みの上に壁用の合板を取り付けた。今回使用した板はOSB合板という、破碎した木を板状に固めたものになる。1枚板の物よりも模様が独特なため、今回の秘密基地に適していると判断した。天井班の方は前回の続きで、ビニールシートにカラーセロハンの装飾を引き続き行った。その後、天井用骨組みに装飾付きビニールシートと無地のビニールシートを二枚重ねにし、張り込みを行った。2枚重ねにした理由としては、ビニールシートの間にカラーセロハンを挟むことにより、経年劣化と屋外の気候による、飛散などを防止することを考慮した。張り込む際は、油彩画を描く際に使用する支持体である、カンバスを張る際の要領で張り込みを行った。
- 12月16日(水) 天井の取り付け、屋内床の取り付けを行った。取り付けと同時進行で、建物基礎部分に校舎内で取れた枝を装飾的に貼り付け、全体的な見た目を考慮し制作を行った。

3) 秘密基地の制作過程

① 打ち合わせ～フィールドワーク～

秘密基地を校内のどこに設置するか学生同士で話し合いを行う。場所や建物のデザインを決めた後、実際の場所を散策し、設置に適している場所を検討した。

図1-1: 話し合いの風景



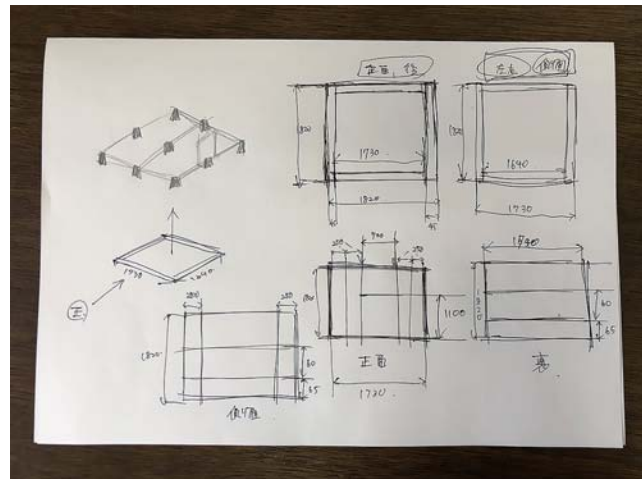
② 建設場所決め

話し合いの結果から模型を作成した。大まかなサイズから必要な木材の量を計算し、把握した。基礎の設置を行う。基礎の場所にはコンクリートブロックを仮置きした。

圖 1-2：模型



図 1-3：設計図



③ 基礎制作

学生と教員が協働し、基礎の制作を行った。

図 2-1：基礎制作の風景



図 2-2：基礎の完成



④ 壁面骨組みパーツ制作

壁骨組みパーツをカットし、組み立てる。壁は4面分制作し、基礎を設置した場所へ搬入した。

図 3-1：壁面パーツの制作



⑤ 壁面組み立て

壁4面分を基礎に取り付け、組み立てを行った。

図 3-2：基礎へ壁面の貼り付け



図 3-3：壁面のねじ止め



⑥ 壁面骨組み塗装

壁面パーツを設置後、防虫、防腐のための塗料を学生同士で分担、協力し、塗布した。

図 4-1：塗装風景



図 4-2：塗装完成風景



⑦ パーツ取り付け

壁面骨組みパーツに壁となる板を取り付けた。

図 5-1：壁取り付け風景



⑧ 壁面完成

4面すべてに壁を貼り付けた。

図 5-2：壁面 3 面取り付け



図 5-3：4 面取り付け



⑨ 天井パーツ制作

天井の骨組みを塗装した。天井にはビニールのシートを張り込み、日光を通せるようにした。好きな形にカットしたカラーセロハンを天井のビニールシートに貼った。

図 6-1：天井骨組み塗装風景



⑩ 天井張り込み作業

カラーセロハンを貼ったビニールシートを天井に貼り、余分な部分をカットした。2枚のビニールシートでカラーセロハンを挟み、強風などの影響で剥がれることのないように制作した。

図 6-2：天井ビニールシート制作



図 6-3：天井完成風景



⑪ 天井パーツ搬入及び取り付け

4面の壁面の上に天井を乗せ、取り付け工事を行った。

図 6-4：天井貼り付け



⑫ 基礎部分装飾

学生をグループ分けし、秘密基地の基礎部分に装飾として、木の枝などを取り付ける。

図 7-1：基礎の装飾



⑬ 屋内床設置

天井パーツを取り付け、屋内の床にフローリングを設置する。

図 8-1：フローリング設置



図 9-1：完成風景



図 9-2：完成内部



3. 考察

1) 子どもの遊びと学びの観点

① フィールドワークの重要性

秘密基地づくりを行う上で場所の選定は重要である。

まずゼミの開始時に学生とどのような場所に設置するのか打ち合わせを行った結果、まずは、自然が感じられる場所を第一に考え、そこから、各工程の仕事が見えやすく、自然環境とともにあることで秘密基地が成立するようなイメージのもと、場所探しを行った。

また、場所の選定の際に、学生から大学に近隣の子どもたちが来た際に遊べるような場所が良いなどの意見や比較的校舎に近い森の辺りが良いのではないかという意見が多くみられた。最終的に秘密基地を設置した場所は、小高い丘の上に位置していて、建物内の窓から外を見ると、坂を見下ろすことができ、更にはこの先に森が広がり、自然の風景を眺めることができる。

実際に学生と教員が校内を歩き回り、どこが子どもの興味を惹き、“わくわく”などの高揚感や楽しみを感じることができる場所を探した。その結果、フィールドワークを通して、学生が普段の学生生活の中で当たり前で過ごしている環境に目を向け、子どもたちの遊びの環境について考えを深めることができる。

② 自然とのふれあい

秘密基地の天井は透明素材を使用しているため、晴れた日には森の木漏れ日が差し込み、屋内にも光が差し込み、自然と一体となったような感覚が体験できるようになった。光が屋内に差し込むと、装飾的に張り込まれたカラーセロハンの光も透過され、壁にその模様が投影される仕組みになっている。このため、自然の中の秘密基地にいるという気持ちが強

まった。また、光の織りなす雰囲気により、非日常的な異質な空間とも思える場所なり、不思議な感覚に浸ることのできる空間に仕上がった。

加えて、秘密基地の周りには動植物が数多く生息しているため、自然を身近に感じ、楽しむことができる環境が整った。

③ 協同性

秘密基地づくりを開始した際、学生の意見をもとに基地の設置場所などを検討した。これは学生が主体的に取り組むためのものであった。話し合いや一つの目標に向かって一緒に作業するなど学生同士の交流が子どもの獲得する協同性を実際に体験することとなった。また、作業の分担など個々の役割を自覚し、行動することで集団における社会性も体験できたと考えられた。

④ 事前の計画の重要性

秘密基地づくりは事前にどのような工程を経て制作するか計画し、模型作りや設計図から全員でイメージを共有することで可能となった。これは実際の保育場面での指導案作りや保育の計画を立てることに役立てると考えられた。

実際の保育において子どもが遊ぶ際に、一日の流れを考え、部分的な活動として、絵本の読み聞かせや手遊びなど様々な導入や諸活動を行う。つまり、保育園における生活では常に次の活動を考え、活動を進めていく。秘密基地の制作においても次に何を行うのか考え、行動した。また、数か月という長い期間をかけて行う事で、現在の進行状況について学生自身が把握し、何を今行うべきか考えることができた。

秘密基地づくりにおいても保育においても事前に計画を立て、先の見通しを持つことで、どのように活動していくか検討することが重要だと考えられた。

2) 保育者養成と学びの観点

① 保育内容「表現」の観点から

厚生労働省（2018）の表現の内容では、「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ」、「生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する」ことが示されている。

秘密基地では。風の心地よさや植物の香り、虫の声や鳥のさえずりなど子どもが嗅覚や聴覚などの五感を通して自然を感じることができる。また、秘密基地の中での遊びでは自然の物を使っておままごとなど様々な遊びを展開することができる。

保育において子どもが自然を体感するとともに遊びの創造性を引き出すような環境づくりは非常に重要であり、秘密基地づくりではそうした遊びを十分に楽しむことができる。

こうした自然と一体になることができる環境の中で子どもたちは創造性を十分に発揮し、楽しむことができるため、秘密基地づくりは子どもの表現活動において非常に大きな意味を持つと考えられる。

② 保育内容「環境」の観点から

厚生労働省（2018）の環境の内容では「安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする」、「身近な生き物に気付き、親しみをもつ」ことが示されている。

秘密基地で遊ぶことで先にも述べたように子どもの五感に働きかけることができる。また、子どもが遊びやすい環境として適しているか学生と教員がフィールドワークを行い、生き物と触れ合いが身近であり、安全で危険な場所ではないことに加え、子どもの想像力が十分に発揮できる環境であるか検討している。

このように秘密基地づくりは、子どもの遊びの環境として様々な展開が想定され、好奇心を強く抱くことができる。

③ 全体を通して

秘密基地づくりは子どもの表現活動や環境として、非常に意義があることだと考えられた。秘密基地づくりの過程では話し合いや一緒に作業をすることで協同性を学び、個々の役割を理解して行動することで社会性など集団の中での学びを多く得られると考えられた。また、制作の段階で先の見通しを立てることは保育の計画や指導案につながっているとも考えられた。

そして、秘密基地づくりは制作過程だけでなく、その後の子どもの遊びにおいても多くの示唆が得られ、子どもたちがこの環境をどのように生かし、楽しむのか想像することができた。実際の現場に出る前に、子どもの遊びについてイメージすることができたことは保育学生において非常に意義のあることだと考えられた。

4. 今後の課題と展望

今年度は新型コロナウイルス感染防止のため、制作した学生へのインタビューや実際に子どもを大学に招き入れ、どのような遊びを展開するのか検討できなかった。

そのため、今後は秘密基地づくりに関して、学生にとってどんな学びを体験できたかインタビューなどを通して検討していきたい。また、実際の子どもの活動を観察し、どのような遊びが展開をされるのか検討したい

また、保育場面以外において秘密基地は竹内ら（2010）は、中学校でのクラブ活動の一環として秘密基地づくりを行い、「森の中での活動を介してお互いが人間関係づくりのスキルを積みあげ、自分の課題を克服して学校生活を送っている」ことを挙げている。また、相馬（2009）では、子どもへのプレイセラピーにおいて秘密基地の制作が治療の中で展開されていた。

このように保育園だけでなく、中学生のように制作する年齢が上がった際には、人間関係における社会性を身に着けることができる。そのため、中学生や高校生にも秘密基地づくりや秘密基地を用いた遊びを行ってもらい、秘密基地の様々な効果や影響について検討したい。また、子どもへのカウンセリングの中での秘密基地の制作という遊びの意味についても今後検討したい。

註

註1（10の姿） 1.健康な心と体 2.自立心 3.共同性 4.徳性・規範意識の芽生え 5.社会生活とのかかわり 6.思考力の芽生え 7.自然との関わり・生命尊重 8.数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 9.言葉による伝え合い 10.豊かな感性

註2（ ）内は筆者作成

引用・参考文献

厚生労働省（2018）「保育所保育指針解説」

文部科学省（2018）「幼稚園教育要領」https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」

塩川寿平，倉田新，藤本吉伸，富田喜代子，小川清美，俵積田恵美子，山田温子，仙田 満「『名のない遊び』を育てる新しい保育方法論について：実践者から、失敗と成功の保育事例を通して学ぶ」日本保育学会大会研究論文集（52） S58-S59

尾方孝弘（2012）「秘密基地の作り方」飛鳥新社 p4

相馬慎吾（2009）「アスペルガー障害の診断を受けた不登校男児におけるプレイセラピーの経過—『積み木制作』から『戦い遊び』への変遷を通して」治療教育学研究（29）pp37-46

竹村景生，池島徳大，谷口義昭，今辻恵美子（2010）「校内里山づくりを核とした学校臨床改善プログラムの構築（4）『秘密基地づくり』『マコモプロジェクト』の取り組みを通して」教育実践総合センター研究紀要 19 巻 pp183-188

保育における「音楽・音楽表現」に関する一考察 —サウンド・エデュケーション（音さがし）を通して—

A Study on “Music and Music Expression” in Childcare
—Through Sound Education—

福 泉 博 子
FUKUIZUMI Hiroko

I 問題と関心

表現の分野で音楽は大きな役割を担っている。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針（3歳以上児）」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（満3歳以上の園児）」の領域「表現」の《内容⑥》において「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」ことが記されており、保育者が子どもたちと音楽を楽しむうえで、豊富な音楽知識やピアノ、歌唱などの演奏技術を習得する必要があることは言うまでもない。保育者養成校では、学生の音楽知識や子どもの歌唱活動支援を目的としたピアノ弾き歌いについて、より良い指導法が常に研究され、学生に反映されている。しかし、子どもたちの感性や表現力を豊かにしていくには、歌や楽器あそびの支援・指導法だけではなく、音そのものを感じ、他の表現方法に変換できる力こそが大切なのではないだろうか。平成29年告示の改定では、「内容の取扱い」（1）の項目に「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」と付け加えられ、（3）の項目には、「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」という文章が付け加えられた。これらの内容を子どもたちに反映するためには、保育者自身が子どもたち以上に音を感じ、創造性のある表現が出来なくてはならない。筆者は本学の学生が生活や身近にある環境の「音」に対してどのような関心を寄せるか大変興味を持った。本研究は、カナダの作曲家 R. マリー・シェーファーが考案した、音に対する感受性と想像力を育てる手法の総合的学習「サウンド・エデュケーション」を活用し、音楽表現の経験の浅い学生にキャンパス内で「音さがし」を体験させ、音に対して興味関心を持たせることをねらいとし、学生が自身で見つけた音をどのように感じ、捉え、他の表現へ繋げていくことが出来るのかを調査し、この活動から得られた知見を「音あそび」の授業に取り入れ、多様性、発展性ある授業を展開することを目的とする。

II 音楽の授業について

1 【授業の概要】

本授業は通年の授業で、対象学年は1年生である。保育者として必要となる音楽の基礎的な知識理解と、技能の習得を目指す。前期では、初級クラス、経験者クラスの2グループに分け、楽典、歌唱法、ソルフェージュ、弾き歌いに関する授業を実施する。後期にはピアノや弾き歌いなどの個人レッスンを実施し、音楽について総合的に学習する。また、オカリナや手作り楽器制作、本学の自然環境を生かした音あそびの中で、五感と創造力を養う。

2 【ねらい】

- 1）幼稚園や保育所などで歌う「こども・幼児のうた」の特性を学び、ピアノで弾き歌いをしながら幼児の指導ができる力を身につける。
- 2）自然や生活の中にある音を感じ、声や身体、楽器、身近にあるものを使って音楽を奏でる方法を習得する。また、それらの方法を用いて子どもの発達に合わせた活動が出来るようにする。

3 【到達目標】

- 1）基本的な音楽知識を学び、一人で読譜が出来るようになる。
- 2）自然や生活の中にある音を感じ取ることが出来る。
- 3）声、身体、楽器、生活の中にある素材を使って自由に音楽を創作することが出来る。
- 4）生活の歌、季節の歌を通して子どもの心に伝わる歌い方ができる。
- 5）ピアノ初級者は【ピアノ・弾き歌い進捗表】の応用Ⅱまで、中級者はソナチネアルバムⅠやブルグミュラー、上級者

はソナタアルバムや同レベルのピアノ曲が弾けるようにすることを目標とする。

4 【教員体制と教授方法】

前期は、初級クラス、経験者クラスそれぞれを1名の教員が担当し、楽典やピアノの習熟度に合わせた指導をしている。授業では、弾き歌いをはじめ歌唱活動が多岐にわたるため、声楽経験のある教員が指導にあたっている。また、手作り楽器制作や本研究の「音さがし」などの習熟度に差が出ない授業については、合同で実施している。

後期は、毎週ピアノの個人レッスンとなる。5名の教員が指導にあたり、1コマ4～5名の学生を受け持つ。レッスン時間はひとり15分程度で、学生一人ひとりの進度に合わせた指導を実施している。教則本はバイエルを使用しており、バイエル終了者に対してはソナチネアルバムやブルグミュラーを推奨している。

Ⅲ 研究の方法 研究対象授業について

対象学生 2020年度の1年生

学習時期 音楽（前期）授業内

2020年 6月18日・25日

場 所 本学キャンパス内

天 気 18日 曇りのち雨 25日 雨

学習目的 身近な環境や自然の中で音に気付き、五感で感じる。

興味を持った音を他の方法で表現することで、感性を磨き考える力を身に付ける。

- 方 法
- ① 【おとさがしワークシート】[図表1]を学生に配布し、活動の概要（以下②～⑧）を伝える
ひとり4～5つの音を探すように指示する
 - ② キャンパス内を自由に散策し、聴こえてくる音、興味を持った音を書き出す
 - ③ 音が聴こえてきた場所を書き出す
 - ④ 見つけた音をオノマトペ（擬音語・擬声語）で表現する
 - ⑤ 音を聴いたときに、どのような感情を持ったかを書く
 - ⑥ 見つけた音を、楽器や身近なものを使って同じような音を作る
 - ⑦ 見つけた音を、形で表現する
 - ⑧ 見つけた音を使って、遊びや活動を考える

初夏のやまたんで おとさがし

音楽・前期

組 学籍番号 氏 名

大学内をめぐり、聞こえてきた音を書き出してみよう。

この活動の目的	感性を磨く。音楽などの表現の分野では、まずは感じる事が大切です。感じたままに書いてみましょう。 耳を澄ましてあちこちから聞こえてくる音を感じましょう。そして、その音を様々な方法で表現しましょう。
---------	--

どんな音があったかな	
場所はどこかな	
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	
その音を聞くとどんな気持ちになる？	
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	
もし色を付けるとしたら…	
音を形で表現しよう	

どんな音があったかな	
場所はどこかな	
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	
その音を聞くとどんな気持ちになる？	
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	
もし色を付けるとしたら…	
音を形で表現しよう	

見つけた音で、もし子どもたちと一緒に遊ぶならどんな遊びをしますか

みつけた音	
①	②
③	④

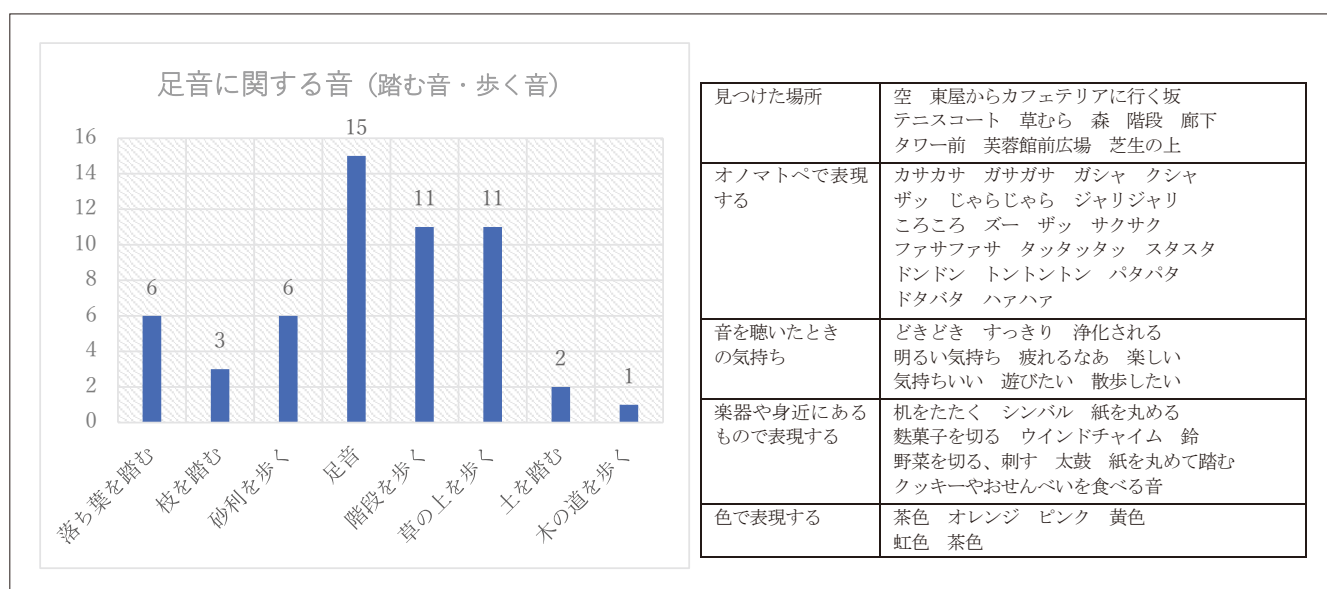
どんな遊びをしますか？ 遊びの行程を4行程に分け、文章と絵にかいてみよう

図表1 おとさがしワークシート

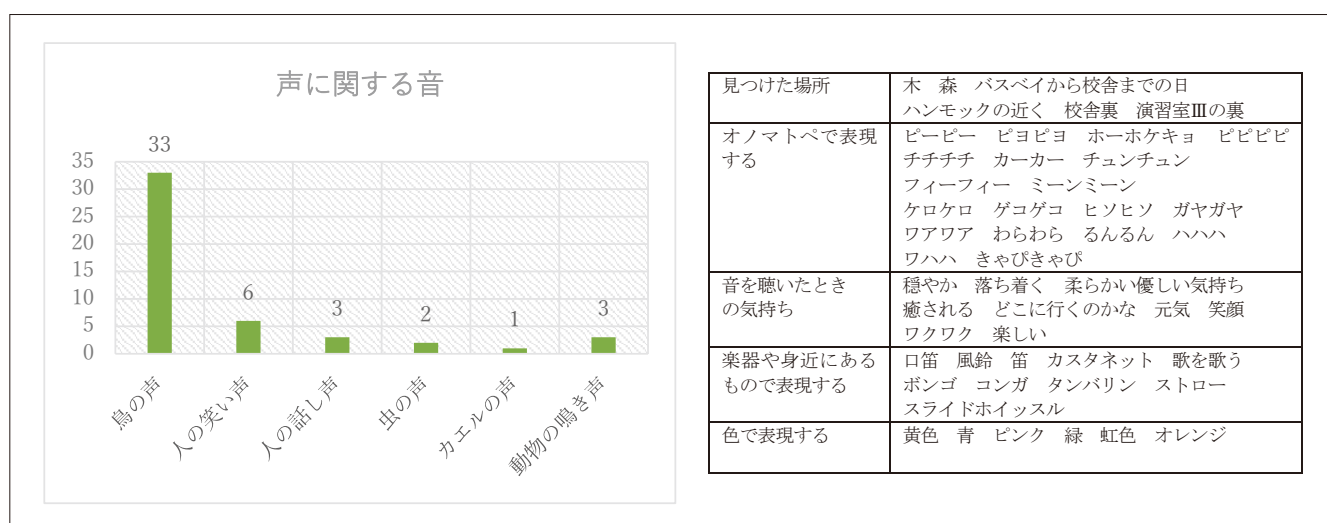
Ⅳ 結果と考察

1 どんな音が聴こえてきたか 聴こえた場所はどこか

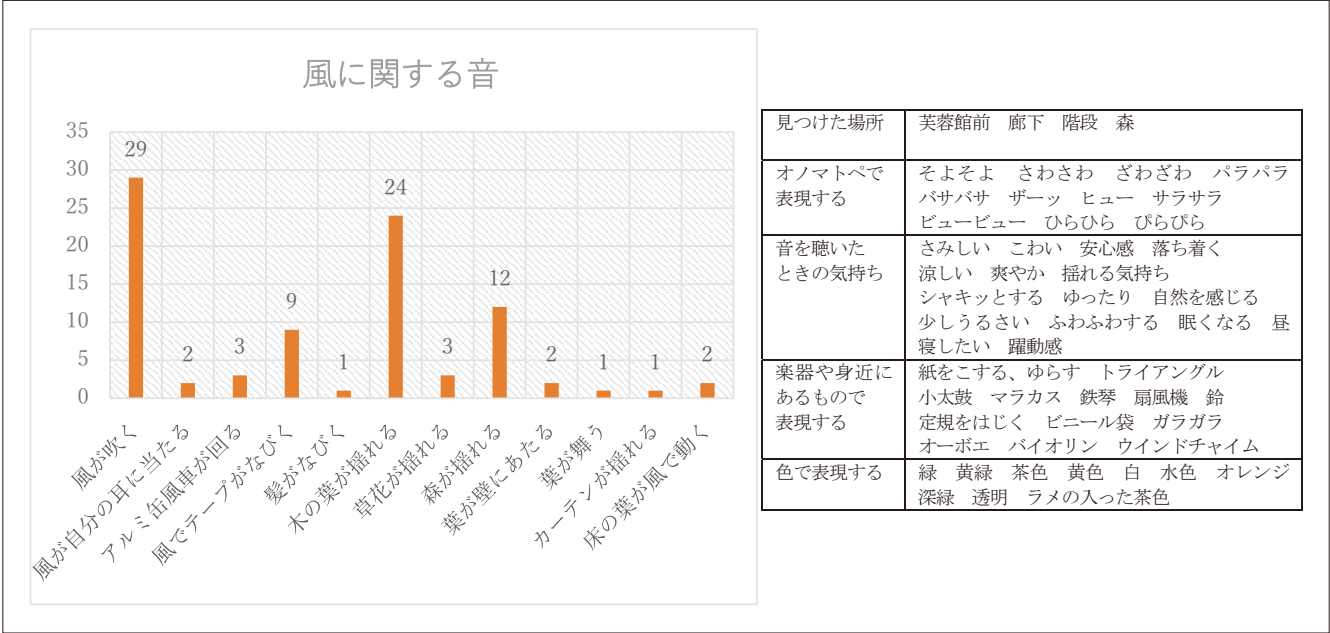
【おとさがしワークシート】の「どんな音があったか」では、学生から回答があった音は72種類あった。それらを《足音に関する音〔図表2-1〕》《声に関する音〔図表2-2〕》《風に関する音〔図表2-3〕》《雨、水に関する音〔図表2-4〕》《自然界にある実際には聴こえない音〔図表2-5〕》《乗り物・人工物の音〔図表2-6〕》《生活・身近にある音〔図表2-7〕》の7つの項目に分類した。本学のキャンパスが木々の多い豊かな自然環境にあること、当日の天候が雨だったことなどから、「植物」「雨」「風」「生き物」に関連する音をあげた学生が多かった。その中でも興味深かったのは、《自然界にある実際には聴こえない音》の項目の「太陽の光る音」「木々の息吹や鼓動」「紫陽花などの花の声」「虫やアリの歩く音」や、《生活・身近にある音》の項目の「色鉛筆が転がる音」「おながが鳴る音」「友達がのぞく音」である。また、《風に関する音》では、「葉が揺れる」だけではなく、「葉が壁にあたる音」「床の上の落葉が風で動く音」「友達の髪の毛がなびく音」など、着眼点が面白い回答が出された。また、風の音を「風の歌」と表現した学生もいて、言葉の選択が詩的で美しいと感心した。音を聴いた場所は、戸外ではバスベイから校舎までの坂道、ロッジ付近の林の中や東屋からカフェテリアへの坂、テニスコートや校舎裏の学生駐車場付近など、戸内では、教室前や廊下、階段など広範囲にわたる。



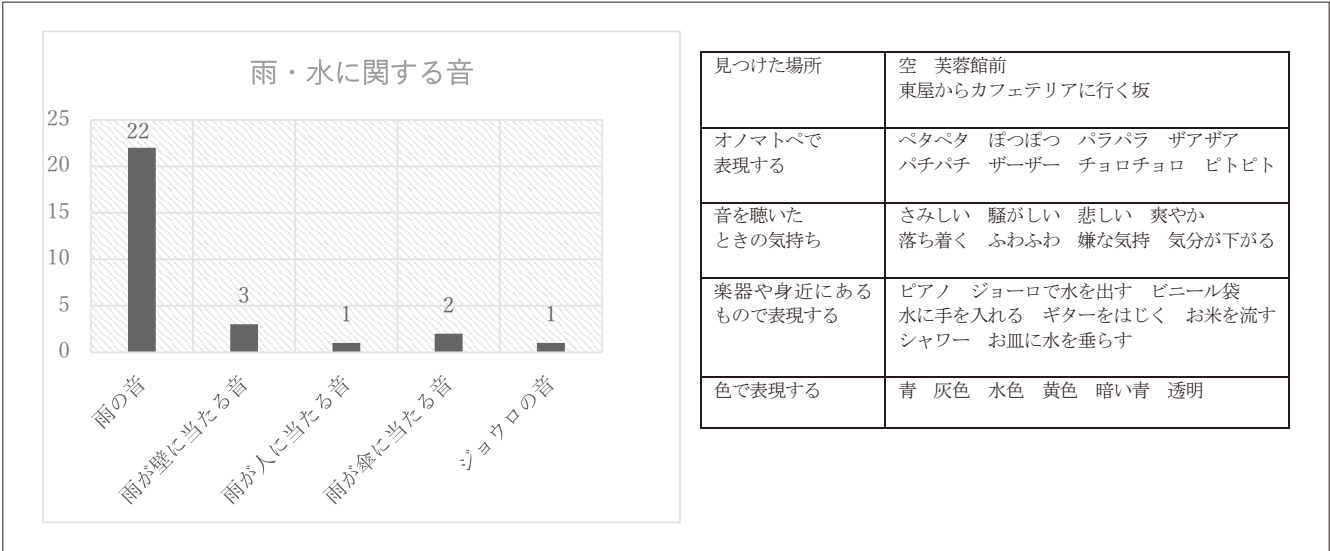
図表2-1 足音に関する音（踏む音・歩く音）



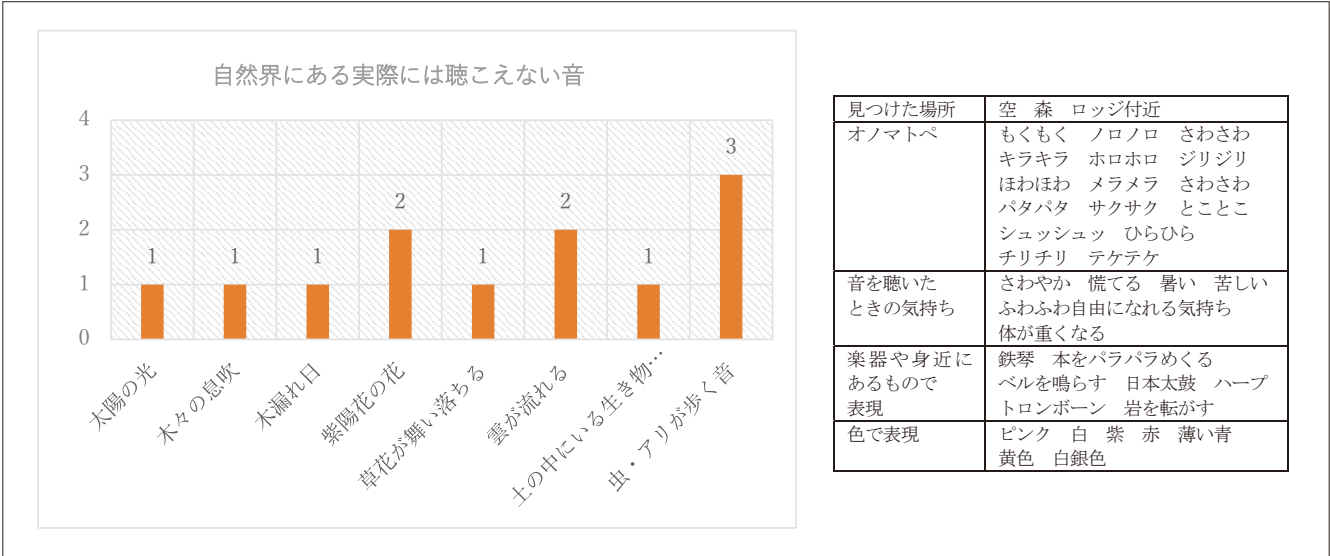
図表2-2 声に関する音



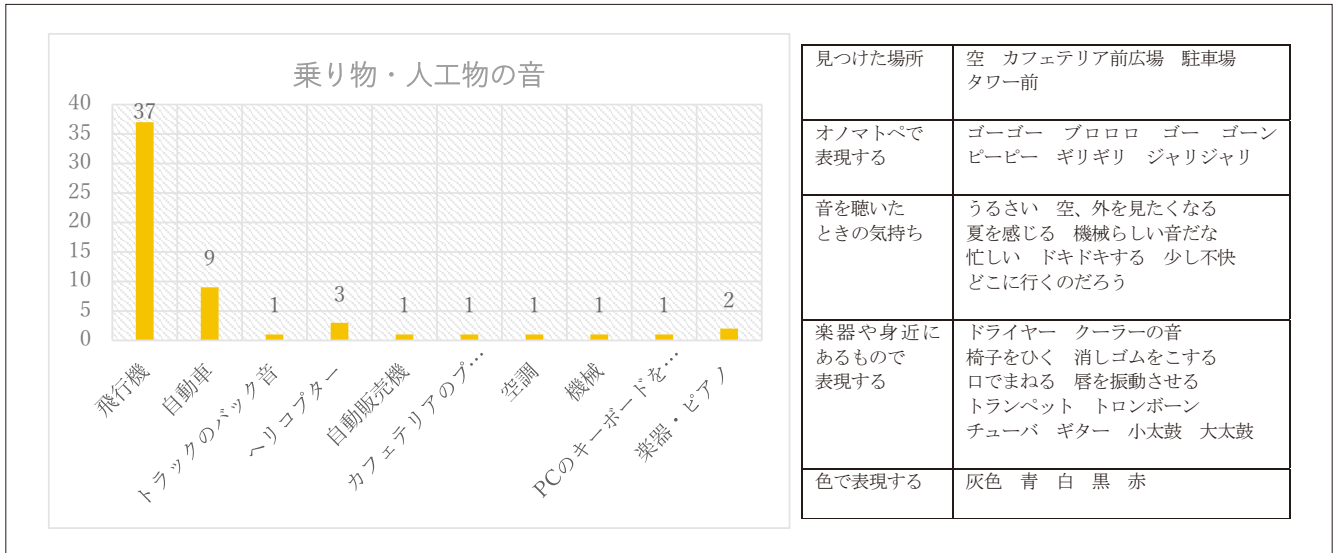
図表 2-3 風に関する音



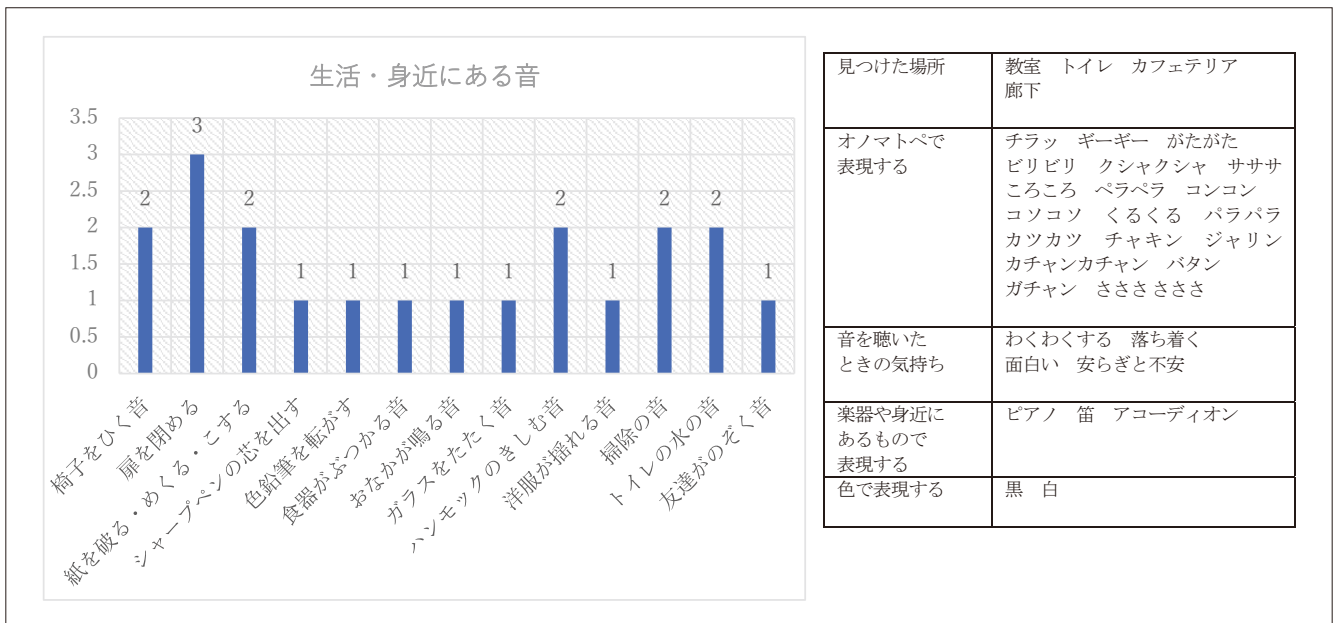
図表 2-4 雨・水に関する音



図表 2-5 自然界にある実際には聞こえない音



図表2-6 乗り物・人工物の音



図表2-7 生活・身近にある音

2 見つけた音をオノマトペ（擬音語・擬声語）で表現する

オノマトペでの表現の《足音に関する音》では、落葉の上は「カサカサ ガサガサ ガシャ クシャ ザッ」、砂利の上を歩くは「じゃらじゃら ジャリジャリ こころろ ズー ザッ」、草の上を歩くでは「サクサク ファサファサ」、廊下を歩く・階段の昇降では、「タッタッタ スタスタ ドンドン トントントン パタパタパタ ドタパタ ハァハァ（息切れの音）」などの回答があり、足音そのものではなく、息の音で表現する面白い回答があった。《声に関する音》では、鳥の声は「ピーピー ピヨピヨ ホーホケキョ ピピピピ チチチチ カーカー チュンチュン フィーフィー」、虫の声は「ミーンミーン ケロケロ ゲコゲコ」、人の声では「ヒソヒソ ガヤガヤ ワアワア わらわら るんるん ハハハ きゃびきゃび」などの回答があった。興味を引いたのは、ひらがなでのオノマトペである。カタカナ表記のオノマトペは主に人の声をイメージした表現であるが、ひらがな表記の「わらわら」「きゃびきゃび」は人が集まっている様子（行動）を表現しており、「るんるん」は、会話をしている人の《楽しい》と思う心情を表現したオノマトペである。《風に関する音》では「そよそよ さわさわ ざわざわ パラパラ バサバサ ザーッ ヒュー サラサラ ビュービュー ひらひら ぴらぴら」などの回答があった。風そのものを表現したオノマトペや、風によって木や葉が揺れる音、森の中を通り抜ける音、教室のドアに貼られていた剥がれかけたビニールテープが風になびく音などが表現されていた。《雨、水に関する音》では「ペタペタ ぽつぽつ パラパラ ザアザア パチパチ ザーザー チョロチョロ」などの回答があった。雨の音を表現した学生が多かったが、雨の音でも、空から降ってくる雨そのものを表現していたり、雨が傘にあたる

音、雨が壁にぶつかる音を表現していた学生もいた。小雨や本降りの雨でも音の表現が違うように、多種多様な音の違いが感じられた。《自然界にある実際には聞こえない音》では「もくもく ノロノロ さわさわ キラキラ ホロホロ ジリジリ ほわほわ メラメラ さわさわ パタパタ サクサク シュッシュッ とことこ ひらひら チリチリ テケテケ」などの回答があった。照り付ける太陽の音、木々の成長や鼓動の音、人間には聴こえない虫の歩く音が表現されていた。《乗り物・人工物の音》では「ゴーゴー ブロロロ ゴー ゴーン पीपीー グリグリ ジャリジャリ」などの回答があった。飛行機が飛ぶ音、トラックのバック音、自動車の走る音、タイヤが地面と擦れる音が表現されており、少し耳障りなオノマトペの表現がされていたのが印象的だった。《生活・身近にある音》では「チラッ ギーギー がたがた ビリビリ クシャクシャ サササ ころころ ペラペラ コンコン コソコソ くるくる パラパラ カツカツ チャキン ジャリン カチャンカチャン」などの回答があった。紙をめくる、破く、鉛筆を転がす、椅子をひく、掃除の音、カフェテリアのプロペラの音など、教室や普段過ごすことの多い空間での音が表現されていた。全体を通して、カタカナでのオノマトペは直線的で堅いイメージ、ひらがなでのオノマトペは柔らかい丸いイメージの音が聴こえてくる。

3 音を聴いたときの気持ち

この項目では、自分の感情を表す「ワクワクする ドキドキする 楽しい さみしい 怖い 爽やか 安心する」などを表現した回答と、「散歩したい 遊びたい 昼寝したい、外を見たくなる」など感情と願望が一緒になった気持ちを表現した回答があった。《乗り物や人工物の音》では、「機械らしい音だな」という感情というより、飛行機などの乗り物に対しての直接的な感想と、「どこに行くのだろう」という乗り物に乗った人達は「遊びに行くのだろうか、仕事に行くのだろうか、帰るのだろうか」と考え想像する回答も興味深かった。

4 楽器や身近にあるもので表現する

それぞれの項目で似た音を表現するために笛や楽器を選択することや、声や身体で表現することは予想ができた。回答を見ると音の表現にふさわしい楽器が選択されており、学生が音のイメージをつかみ、自分が知っている楽器の中で、似た音を表現することが出来ている。その他の回答として、楽器を選択しない学生もいた。その中で興味深かった回答は、「野菜を切る」「クッキーやせんべいを食べる」「麩菓子を作る」「紙を丸めて踏む」「紙をこする」「定規をはじく」「お米を流す・ザルで洗う」や、ドライヤーや扇風機（風量や風向きを調節）などの日用品を使って音を表現したものだ。これらは、効果音を作る手法で、楽器よりももっと本物に近い音の表現ができる。学生が、楽器以外で表現ができないか、思い浮かんだ素材をどのように使ったら聴いた音に近くなるかを考えている様子が伺える。この発想力や思考力は、保育者になるうえで大切な能力であると筆者は考える。この活動を繰り返すことで、学生に発想力や企画力が芽生え、多様性、発展性のある音あそびを子どもたちと共に楽しめると考えられる。

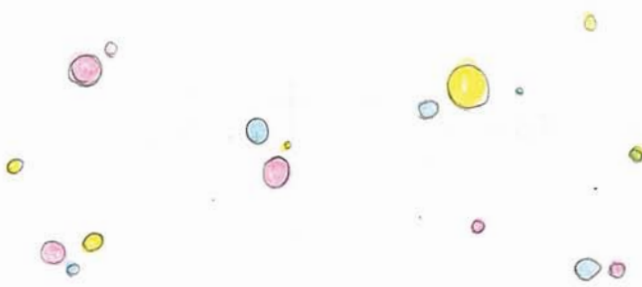
5 色で表現する

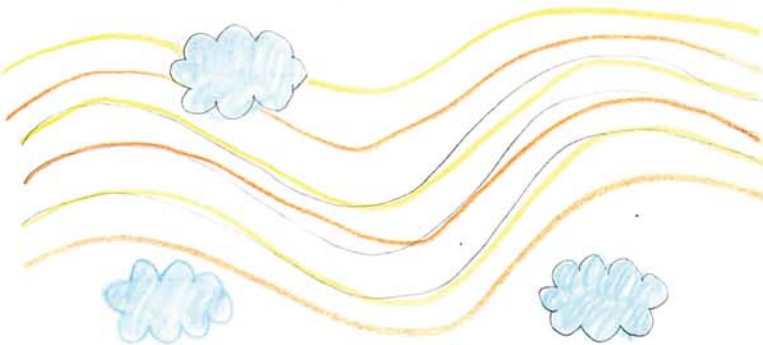
同じ音でも、その時の学生の情緒や感情で明るい色、暗い色両方の色彩が表現されていることがわかる。《雨、水に関する音》では、爽やかに感じる学生は水色や黄色を選択し、さみしい、気分が下がると感じた学生は、暗い青や灰色を選択した。他項目でも同じ傾向がみられる。

6 音を形で表現する

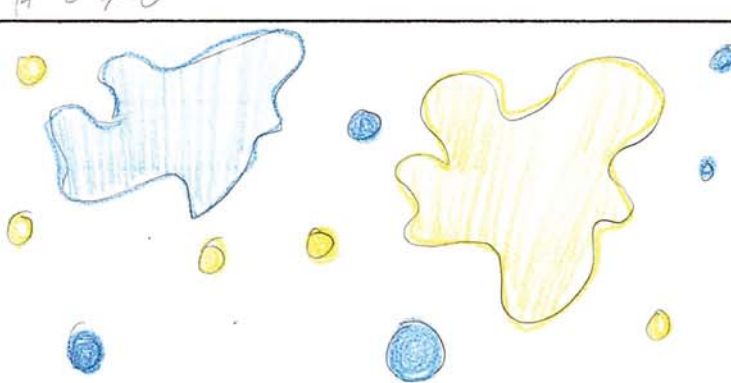
音探しで見つけた音を《2 見つけた音をオノマトペ（擬音語・擬声語）で表現する》《3 音を聴いたときの気持ち》《5 色で表現する》をもとに、音を形にして視覚化表現をする試みも行った。木や鳥、飛行機など実際に音を出している物体を描く学生が多かったが、音からのイメージを線や図形で表現した学生もあり、独創的で大変面白かった。（[図表3] おとさがしワークプリント 学生回答プリント一例）その図形を見ていると風景が想像でき、風や水のメロディが聴こえてくるようである。

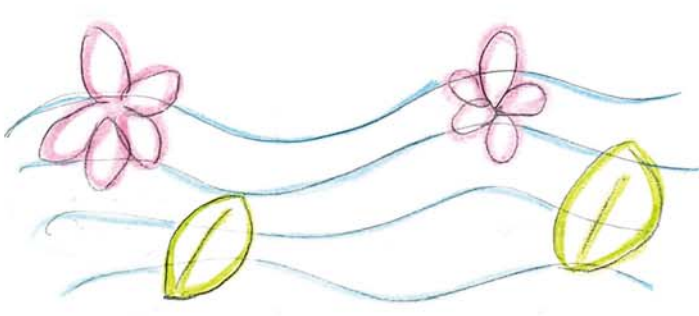
図表3 おとさがしワークプリント 学生回答プリント一例

どんな音があったかな	鳥が鳴く音
場所はどこかな	大学内のどこか
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	チュンチュン、ピーピー
その音を聞くとどんな気持ちになる?	かみ...らしい鳥の声で和やかな気持ち
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	ピアノの高い音でかみ...鳥の声と表現
もし色を付けるとしたら...	ピンク、黄色、水色
音を形で表現しよう	

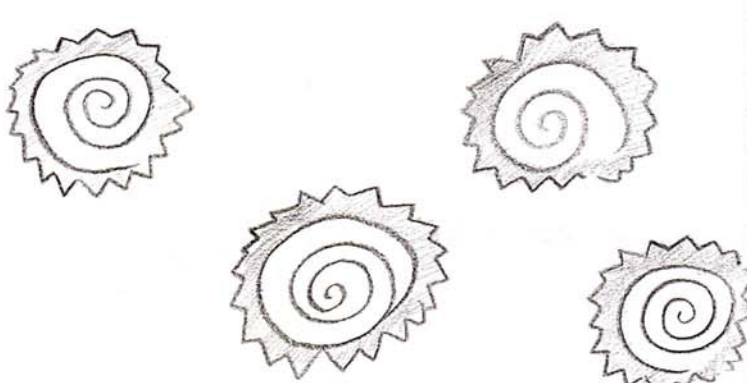
どんな音があったかな	雲が動く音
場所はどこかな	外
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	もくもく、ノロノロ
その音を聞くとどんな気持ちになる?	落ち着く、おだやかな気持ち
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	ハープでさわやかを出す
もし色を付けるとしたら...	黄色
音を形で表現しよう	

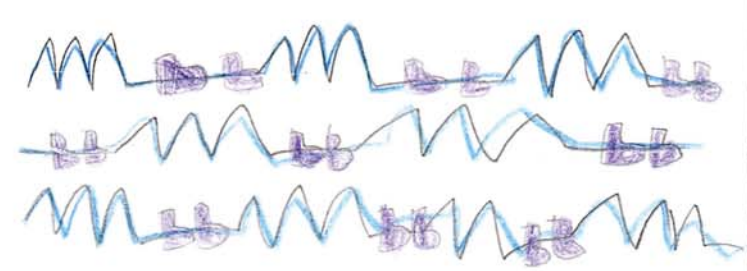
どんな音があったかな	木に耳をあてている音
場所はどこかな	木の幹
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	しりしり、サササ
その音を聞くとどんな気持ちになる？	やさしく、おちつく気持ち 生命をかんじろ。
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	ウィンドチャイル
もし色を付けるとしたら…	黄緑色、黄色、緑、茶
音を形で表現しよう	

どんな音があったかな	雨が体に当たる音
場所はどこかな	自分の腕、肌
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	パタパタ テラテラ ホッホッホ
その音を聞くとどんな気持ちになる？	楽しい、冷たい。
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	絵の具を飛ばして散々に表現。
もし色を付けるとしたら…	青と黄色
音を形で表現しよう	

どんな音があったかな	草や花の揺れる音
場所はどこかな	テニスコート前
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	カサカサ、サワサワ
その音を聞くとどんな気持ちになる?	あつ、さわやか
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	紙を揺らす、ああ
もし色を付けるとしたら...	きいろ
音を形で表現しよう	

どんな音があったかな	机の上の歩く音
場所はどこかな	アスファルトの上
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	トコトコ
その音を聞くとどんな気持ちになる?	フワフワ、あつ
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	ボール、フンカ
もし色を付けるとしたら...	青、灰色
音を形で表現しよう	

どんな音があったかな	飛行機の音
場所はどこかな	空
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	ブーン
その音を聞くとどんな気持ちになる？	ちょっと不快
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	チューバで低い音を出す
もし色を付けるとしたら…	黒
音を形で表現しよう	

どんな音があったかな	紙をこする音
場所はどこかな	音楽室
見つけた音を擬音や擬声語にしてみよう	さささ、さささ
その音を聞くとどんな気持ちになる？	忍者が走っているみたい
楽器や身近にあるもので音を作ってみよう	人がすばやく移動する
もし色を付けるとしたら…	藍色
音を形で表現しよう	

V まとめ

私たちの周りは、実に多種多様な音があり、美しく心地の良い音もあれば耳障りな音もある。生まれた時から音や音楽が溢れている空間で生きている私たちは、音楽に興味を持っても生活の中で聴こえてくる「音」に対しては意識を向けにくい。本研究では、学生にキャンパスをリスニング・ウォークさせ、聴こえた音を書き出すことで、音に意識を向けさせるようにした。そして、そこから音のイメージを想像させ、色、形、声、楽器などで表現させる音の総合的学習「サウンド・エデュケーション」を行った。サウンド・エデュケーションとは、カナダの作曲家 R. マリー・シェーファーが考案した音に対する感受性と想像力を育てる手法である。音を通じて学生たちからは、「聴くことに集中すると、近い音、遠い音、いろんな音が聴こえた」「音を耳で感じるだけではなく、肌で風を感じたり、葉や花の匂いを感じた」「演奏することも楽しいが、音を見つけるという活動も楽しい」との声があった。これらの感想から、授業目的である「身近な環境や自然の中で音に気付き、五感で感じる」ということは概ね達成されたと考える。《オノマトペで表現する》では、多種多様な擬音、擬声語で「見つけた音」が表現され、学生の感情が読み取れた。そして、カタカナでのオノマトペと、ひらがなでのオノマトペでは、受ける印象が異なり、文字の印象が感情や発声に影響を与えることが分かった。《色で表現する》では、同じ音でも明色・暗色両極端の色味で表現がされていたり、柔らかい印象の色や、硬い怖い印象のものもあった。このことから、同環境、同条件でも、学生の性格やその時の情緒や感情によって、聴こえ方や捉え方が変化すると考えられる。季節によっても表現は違ってくるのではないだろうか。引き続き、初夏以外の季節での取り組みと調査を行いたい。

学生から提出された【おとさがしワークプリント】の結果から、学生が「音」に意識と興味を持てたことや、音に対して「爽やか」「不快」「ワクワクする」などの感情を意識できたことが伺える。音を意識して聴くという行為は、感性を育成する第一歩である。この授業を通して、その一歩が踏み出せたとするとともに、他領域で音を表現する方法を知り、音楽活動への学びを深めることができたと考えられる。今後の課題として、筆者自身がサウンド・エデュケーションについての知見を更に深め、音の視覚化や他領域での表現を視野に入れた授業構造の構築を行い、その内容を子どもとの活動や関わりに活かしていきたい。その為には、サウンドスケープ（音風景）やサウンドマップ（音地図）作りの取り組みや、学外学習などでの子どもを交えた活動の実践と、サウンド・エデュケーションの効果の調査・分析を引き続き行うことが必要である。そして、音を聴く行為を見直すことで、まずは学生が自分の周りの環境を意識し、自身の感性や、創造性の向上を認識することが大切であり、さらには、その経験を子どもたちとの活動に繋げる力に発展させられるような授業展開を行いたい。

引用・参考文献

- 1 文部科学省 幼稚園教育要領解説（2018）
- 2 厚生労働省 保育所保育指針解説（2018）
- 3 内閣府・文部科学省・厚生労働省 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（2018）
- 4 R. マリー・シェーファー（2009）今田匡彦 音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション 株式会社 春秋社
- 5 小松正史（2013）サウンド・スケープのトビラ ―音育・音学・音創のすすめ― 株式会社 昭和堂

※付記 実践には至らなかったが、音さがしをテーマにした子どもとの活動を学生が立案したので、いくつか紹介したい。

見つけた音で、もし子どもたちと一緒に遊ぶならどんな遊びをしますか

みつけた音

雲が動いていく音

どんな遊びをしますか？ 遊びの行程を4行程に分け、文章と絵にかいてみよう

- ① 外に行って空を見る
雲の動きを見る



- ② どんな様子が、どんな音が聞こえてきそうか聞く



- ③ 自分が雲になったつもりで体を動かしてみる



楽器を鳴らしたら動く、もう1度鳴らしたら止まる遊び



- ④ 中に戻って空の様子を絵に書く

色々な楽器を使ってそれぞれの楽器でぴったりの音、速さを表す



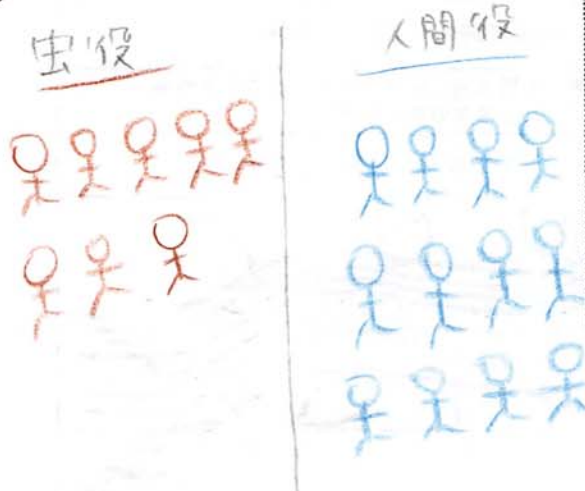
見つけた音で、もし子どもたちと一緒に遊ぶならどんな遊びをしますか

みつけた音

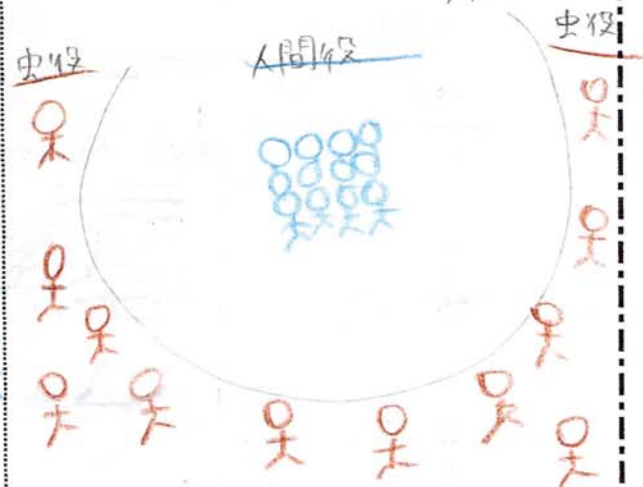
虫が近くを飛ぶ音

どんな遊びをしますか？ 遊びの行程を4行程に分け、文章と絵にかいてみよう

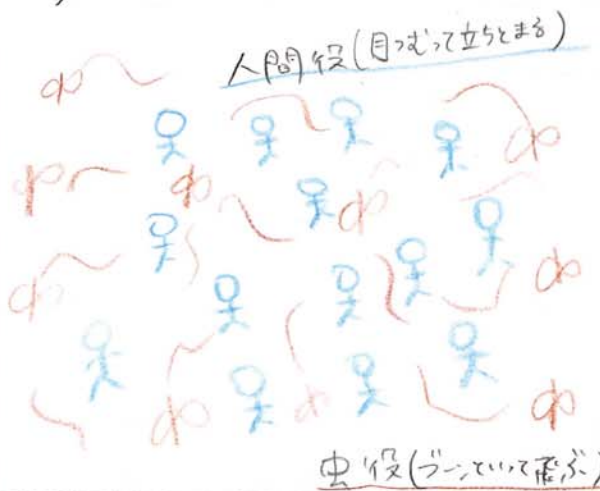
① 虫と人間に分ける (3:7くらい)



② 広場の中央に人間役をあつめて、虫役はまわりにちらばる。



③ 人間役同士で間隔をあけて立ち、目をつぶる。虫役はブーンと言いつつ人間役のまわりをさぶ(かき)る。人間役はうごいてはいけない。



④ 人間役は目をつぶっているので、その場で手を上げて、虫役のブーンという音とタイミングをつかまえてそれをつかまえる。虫役はまわりはかきまわらないようにする。



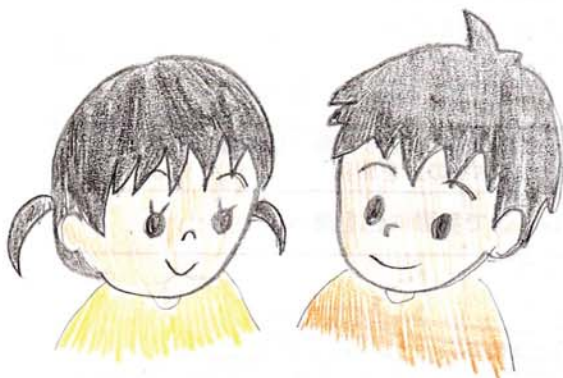
見つけた音で、もし子どもたちと一緒に遊ぶならどんな遊びをしますか

みつけた音

- ・サッパッパ
- ・サッーサッー
- ・ヒューヒュー
- ・バタバタ

どんな遊びをしますか？ 遊びの行程を4行程に分け、文章と絵にかいてみよう

① 2～3人で「ワレワレ」を組む



② マットに書かれた音を探す

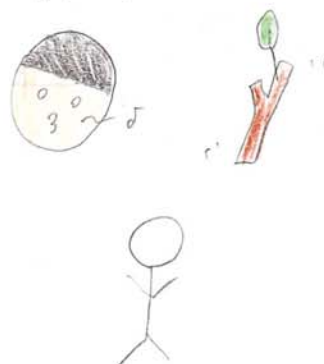


③ 見つけた音を折る



④ 全部見つけたらおわり

どんな風に感じたら発表会
くちまねっ → 近くにあるものでまねっ
→ 1人でまねっ



見つけた音で、もし子どもたちと一緒に遊ぶならどんな遊びをしますか

見つけた音

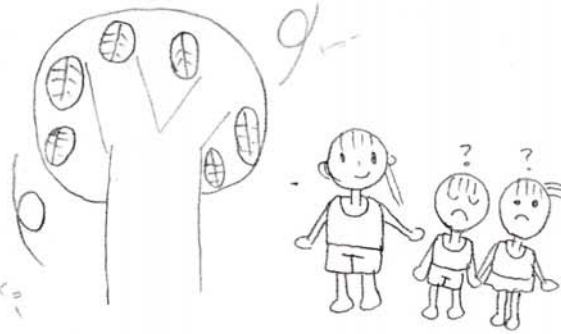
木α 葉っぱが"サワサワ"している音

どんな遊びをしますか？ 遊びの行程を4行程に分け、文章と絵にかいてみよう

① 子どもたちに木が"サワサワ"している所を見せる。



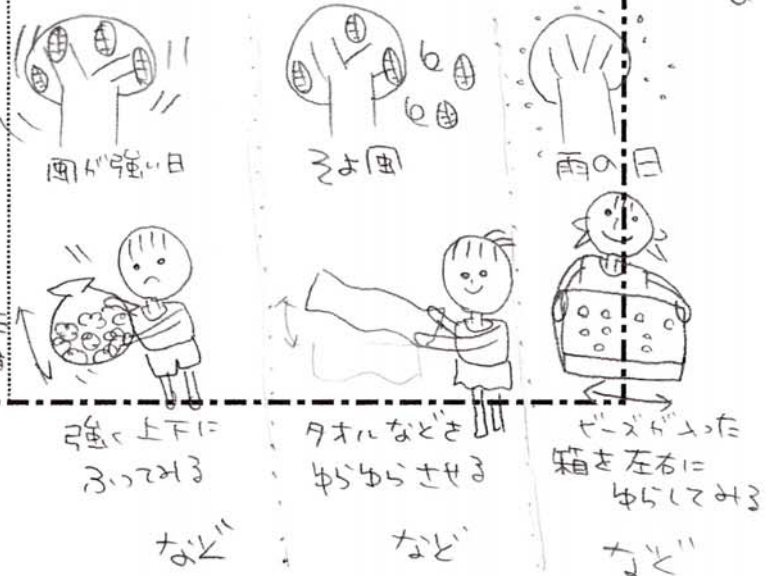
② なぜ"葉が"サワサワ"しているのか 子どもたちに聞いてみる。



③ 新聞を袋に入れて"ササガサ"したり、ビニール袋をぐしぐしにさせたりして身の回りで葉の"サワサワ"を表現させる。



④ 風が強い日と弱い日、雨が降っている時など色々な時の木と葉の音の様子を見たり、聞いて、それぞれ身の回りの物で表現してみる



見つけた音で、もし子どもたちと一緒に遊ぶならどんな遊びをしますか

みつけた音

みんなが手元を持っていた紙の音。

どんな遊びをしますか？ 遊びの行程を4行程に分け、文章と絵にかいてみよう

①

新聞紙を手で持ち、走り回る。



②

新聞紙をたたくくしゃくしゃに して丸めて集める遊び。



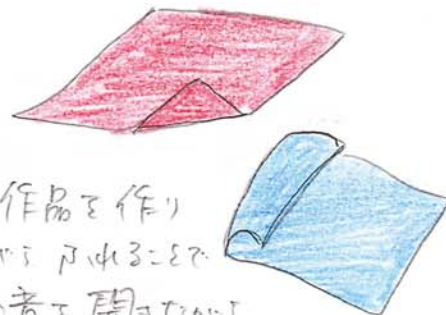
手で丸めることで、もみ音、閉める 音で集めると思ふ

③



④

折り紙。



手で作品を作り 手紙の音、紙の音で 遊びにできる。

見つけた音で、もし子どもたちと一緒に遊ぶならどんな遊びをしますか

みつけた音

おち葉の上をぬるく 音

どんな遊びをしますか？ 遊びの行程を4行程に分け、文章と絵にかいてみよう

①

91に 出て あり 案の 上を あり 112 中
 121. こんで 中2 どん 音か 138 案 121



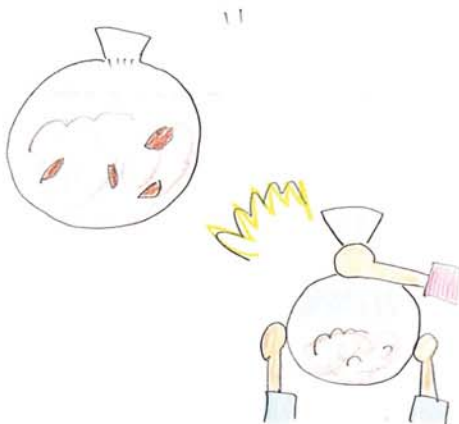
②

ある。これ意外にも、子、わ、と、ち、と、け、と、け、
葉、同、と、け、か、と、け、あ、と、け、あ、と、け、
か、と、け、



③

その子くろをたていて出る番をたのしむ



④

おんじやうとてんてんてんてんてんてんてん
たか登系に体象にみよ



山 村 学 園 短 期 大 学
図 書 ・ 紀 要 委 員 会

野 口 一 夫
福 泉 博 子
酒 井 誠

山村学園短期大学紀要 第 31 号

2021 年 3 月 31 日 発行

編集者 山村学園短期大学 図書・紀要委員会

発行者 山村学園短期大学 子ども学科

代 表 野口 一夫

埼玉県比企郡鳩山町石坂 604

〒 350-0396 TEL 049-296-2000 (代)

印刷社 三美印刷株式会社

東京都荒川区西日暮里 5-16-7

〒 116-0013 TEL 03-5604-7292 (代)

THE BULLETIN OF YAMAMURA GAKUEN COLLEGE

Volume 31

AIZAWA Kazue :

Understanding the world of Picture book writer Akiko Hayashi's world
— Traces her work and half life —

KAMOSHIDA Kana :

A Study of what is important to create expression activities
in Childcare — Focusing on collaboration between children, childcare
workers, and specialized instructors —

SUDATE Yoshihiro SAKAI Makoto :

Building a secret base play linked to “environment” and “expression”
in childcare — Play with nature —

FUKUIZUMI Hiroko :

A Study on “Music and Music Expression” in Childcare
— Through Sound Education —

YAMAMURA GAKUEN COLLEGE
THE DEPARTMENT OF EARLY CHILDHOOD CARE AND EDUCATION

2020